

近松會雜誌

第一号



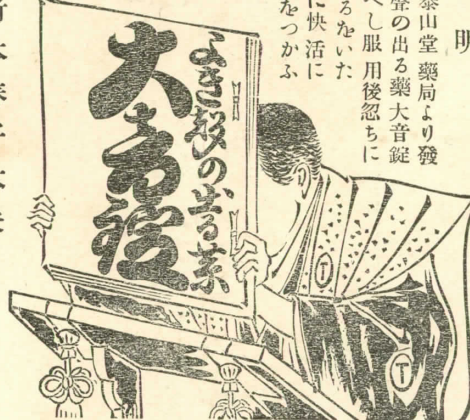
よき聲の出る新薬

本劑は一般この病を治し及日々發聲の常用藥にして能くたんを祛りせきを治す故に美聲を望む人の一日も缺ぐべからざる靈藥なり

價 箱入金壹圓、五拾錢、貳拾五錢、袋入金拾錢

實驗證明

此度當市新町通伊藤泰山堂藥局より發賣せられたるよき聲の出る藥大音錠を試みましたが驚くべし服用後忽ちにして効ありて咽喉うるないたんをきり聲をつかふに快活に發聲し得られ何程聲をつかふとも勞れず而も藥味頗る美にして服み易きは確に我等の實驗したるところなり從來より如此不思議なる聲の藥は絶て見たることなし故に大方の發聲家諸彦に此よき聲の出る藥大音錠を御紹介申上ます



竹本春子太夫
豐澤新左衛門

効能の確實なるは前記實驗證明の如し其他諸曲大家或は琵琶歌詩吟、俳優、浪花節、常盤津、歌澤長歌等諸流の師匠又種々なる方面の發聲家より澤山賛辭を寄せられたり(省略)殊に發聲上に多大の關係を有する義太夫界諸彦幸に御愛用の光榮を賜らんことを乞ふ

本舖 大阪市西區新町三 伊藤泰山堂營業所

カ子シヨン印
舶來タイプライター用カ子シヨン紙

日本政府登録済



カ子シヨン印

カ子シヨン印
舶來タイプライター用

一手輸入販賣元

神戸 明輝

(電話)

近松會雜誌第壹號目次

口 繪

近松集林子像及贊(難波土產所載)木版

近松集林子墓(攝州川邊郡久々知廣濟寺内)寫真版

本會記事

趣意書

會則並に決議書

會員名簿役員贊助員

本會成立の次第

會告

祝 詞

岩田義玄、竹本攝津大棧、竹本大隅太夫、朝日山四郎右衛門、竹本叶太夫

論 說

近松會雜誌の發刊に際し聊近松を論じ

更に藝林の諸子に及ぶ

近松會雜誌の發刊について

講 筵

忠兵衛 雲途の飛脚

青瑠璃漢

雜 錄

近松一中節

六代目染太夫自傳

近松と俳諧

近松は日本の太史公

大家の見たる近松

集林子の遺物について

瑠璃の屑

近松の新釋につきて

近松の產地説について

古今文苑

●題近松平安翁像 穂積以實 ●三勝の墓にて 離寓主人 ●道頓堀の芝居を 曉晴翁 ●近松饅頭をよみて 攝津大棧 ●國性爺 竹本叶太夫 ●近松信盛 小野利教 ●其他川柳狂句

藝界時報

播重の記念碑 ●小林長十郎 ●入道雲右衛門 ●芝居の芝居 紋十郎の病氣と廣助の全快 ●錦太夫の入替 ●竹三郎の東下り ●竹本南部太夫の巡業

會員消息

廣告

●訂正第四版●

獨逸樞密醫官婦人科教授醫學博士ヘーガル先生原著
日本緒方婦人科病院院長醫學博士緒方正清先生譯述

社會的色慾論

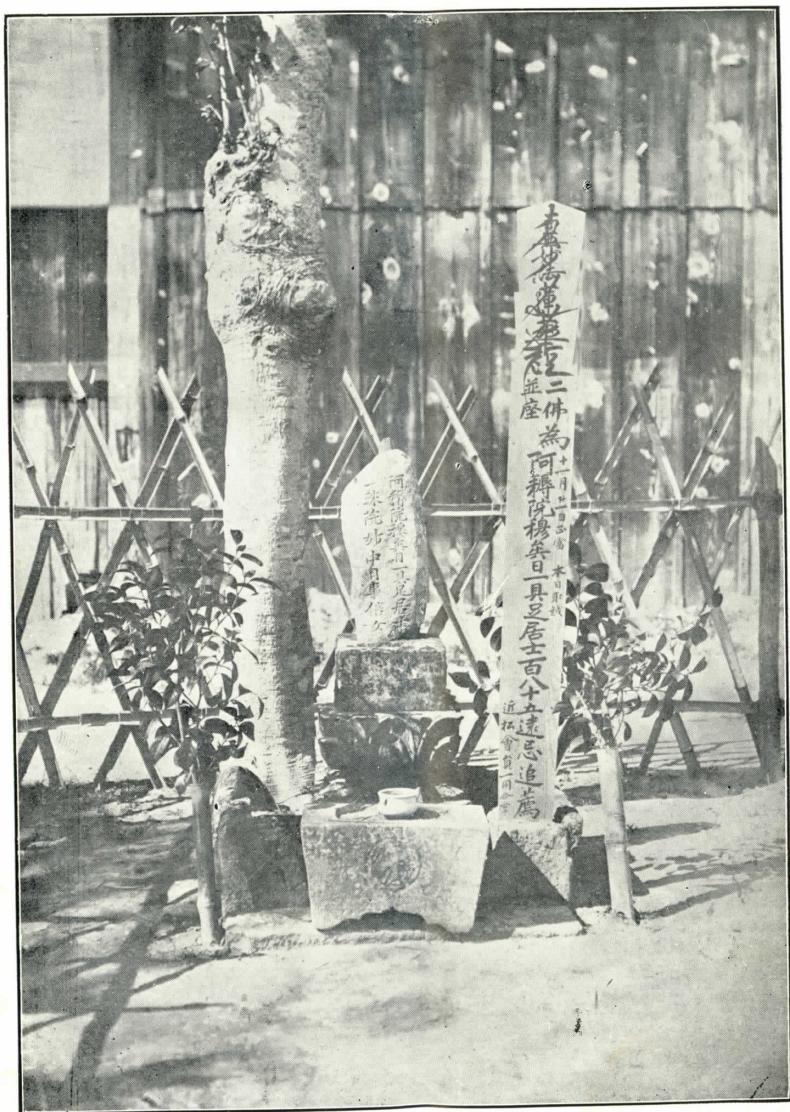
全一冊 洋裝頗美本
正價金壹圓
郵稅金八錢

此書は現今婦人科學の泰斗たるヘーガル先生が多年の經驗に徴し色慾の原理を精密なる統計に基き社會に於ける色情の關係を生理學及び哲學上より論究しヘーガル氏等が社會と婦人に對する著書を論破したる者にして書中には交接の生理、男女色慾の比較、色情の健康と壽命とに對する社會的關係、婚嫁者と獨身者に於ける壽命の關係、房事と壽命、自殺者―狂者―淫慾亢進症―花風病、刑事學、房事に因する生殖器諸病、房事過度、野卑なる戀愛―強姦、房事と家族、夫婦間に兒なき者、色情に於ける國家の侵襲、生兒數と殖民地との關係、選兵と移住民、英國と佛國の狀態、國家生産と貿易の調節、殖民政略、ビーシヨッフ氏の學說、房事と繁殖作用、子孫の性質、血族結婚、社會的血族、遺傳學說、結婚選擇等諸項を收め議論斬新精緻にして而かも文章平易なれば醫學者は勿論社會民政學者より一般士女に至るまで苟も生を此世に享たるものゝ必らず一讀すべき寶典なり

東京 大阪 京都 丸善株式會社

見性却清醇
享齡擬壯椿
春溫渾滿腔
空眼轉洪鈞
句翰謔歌妙
少殘綺語神
甲休門榜燦
樂隱特相親
右題近松
平安翁像





墓翁松近内寺濟廣知々久崎神津攝

近松會雜誌 (第一號)



本會記事

近松會趣旨

文豪巢林子近松門左衛門の文學に淨瑠璃に歌舞伎劇にその功績の偉大なることは、更めて説くまでも無く遍く世間の知る所なり、殊に昨今は外國人が日本文學史を著して廣く世界に布くやうになり、近松を英國のセクスピア、獨逸のワグネルに比するものもあり、實に近松の作品が人情の微を穿ち世味の實を盡したる妙は、決してセクスピアに譲るべくもなく、その淨瑠璃の樂曲に音節の妙を極めて入神の技あるは、また決してワグネルに劣らざるなり、されば近松巢林子は、單に文學の人として偉大なるのみならず、淨瑠璃の樂劇作家として偉大なることは、英獨の二大文豪をその一身に兼ねしものごいふべし、二

百五十餘年前の日本に斯かる大文豪の生れたるは、わが同胞の光榮ならずや、ワグネルは獨逸が樂劇の聖人として近代に誇る所、セクスピアは英國が世界の文豪として永遠に誇る所、世界の文人樂家は孰れも此二家の作品を研究して新しき作品に資し或は考證に努めつゝあり、二家を記念すべき設備は、銅像に文學會に音樂會に文人協會に圖書館に擧て數へきれぬ程なり、わが文豪巢林子近松門左衛門翁の遺蹟は、日本に於て如何に記念されあるか、巢林子がその事業を成したる地の大阪に於てすら如何に記念されあるか。

近松巢林子の墳墓は攝津河邊郡久々知村廣濟寺に現存す、現存すとは名のみにして唯だ一基の石礪風露寂寞の裡に立てり、蘚苔逕に深うして人跡の印する稀に、寺門蕭條として香烟の上る少し、大阪の芝居は元祿の昔のまゝ道頓堀に榮に淨瑠璃樂の劇場も月毎に興行せらるれども、これが繁昌の基礎を据ゐたる巢林子の瑩域は殆ど世に忘れられたるの狀あり、同胞の情誼に富み祖先の祭祀に厚き日本國民が、その同胞祖先たる文豪に對して、斯く冷淡なる筈無かるべし、近松會が創立せらるゝは、第一之が爲なり。

近松巢林子の作品は、その數百以上ありといふも、今日まで完備したる近松全集無く、また淨瑠璃中近松の作にして無名のものあるが爲に、その眞偽の未だ確にせられざるありその傳記に於ても、權例として信ずるに足るべき述作未だ刊行せられざるなり、巢林子の作品が、文學上よりしても淨瑠璃樂上よりしても、歷史上よりしても、思想上よりしても、今後研究すべき必要實に多く且つ廣し、まかも之が研究に依りて、將來樂劇の新しきものを生むの基を開かん便宜を得べく、演劇脚本に新しき生命を供するの機會ともならん、近松會創立の趣旨また茲に存す。

近松會は以上の趣旨を以て、廣く有志の賛同に依り、文豪記念の實を表彰し、近松研究を努めて以て文學と淨瑠璃との二者兼得てその發達に資せんことを、大方の諸君本會の精神を諒し會則の規定に準じ奮つて本會の趣旨を大成されんことを請ふ。

近松會々則

一、目的

本會ハ文豪近松巢林子ノ功績ヲ發揚シ其ノ遺趾ノ保存維持ヲ圖リ兼テ淨瑠璃道ノ獎勵發達ヲ以テ目的トス

二、名稱及ビ事務所

本會ヲ近松會ト稱シ事務所ヲ大阪市内ニ置ク

三、役員

本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長 一名 副會長 一名 會計監督 二名
評議員 若干名 書記 二名

四、會員

本會ノ事業ヲ賛同スル人ハ何人ニテモ入會ヲ諾ス、特ニ金品ヲ寄附シ又ハ功勞アル人ヲ特別賛助員トシ一般事業ヲ賛助スル人ヲ賛助員トシ他ヲ普通會員トス各會員ニハ徽章ヲ交付ス

會員ハ大會、大祭並ニ諸會ニ參與スル外文庫並ニ遺物縱覽ノ便宜ヲ有ス

五、會費

會費ハ一時ニ出金スルモノニシテ別ニ其ノ額ヲ定メズ

六、事業

本會ハ左ノ事業ヲ行フ

- 一、近松翁墳墓ノ修築
- 二、墳墓保存金ノ積立
- 三、文庫ノ建設
- 四、毎年十二月二十一日大會ヲ開キ祭典ヲ行フ
- 五、時々文藝會並ニ淨瑠璃會等ヲ行フ
- 六、斯道ニ關スル講演會ヲ開キ且雜誌ヲ發行ス

附則

一、本會員タラント欲スル人ハ左ノ申込書ニ記名捺印シテ申出ラルベシ但シ可成會員ノ紹介ヲ要ス

會長 土居通夫

副會長 緒方正清

會計監督 渡邊庄助

但シ申込書ハ此ニ掲グズ

客年十二月十九日灘萬樓ニ於テ發起人會ヲ開キ左記事項ヲ決議セリ

六

一、會則制定ノ事

二、現在ノ發起人以外ニ發起人ヲ募リ總員五十名以上ニ滿ス事

但發起人各自ニ於テ勸誘シ事務員ヲシテ周旋セシム

三、創立費トシテ發起人各自出金額ノ内ヨリ貳拾圓以上ヲ出金スルコト

四、寄附金總額壹萬圓ヲ募集スル事

五、募集シタル金額ハ之ヲ頒ツテ概ネ左ノ諸費ニ充ツル事

墳墓修繕

參千圓

内 譯

紀念牌建設費

參千圓

遺物蒐集費

貳千圓

墳墓維持費及例祭費其他雜費

貳千圓

六、募金ハ一般寄附(豫算案ヲ作リテ知事ノ認可ヲ受クルコト)ト會員組織トノ二方法ニ依ルコト

七、當分大阪市糸屋町一丁目(岡田茂馬方)ニ假事務所ヲ設ク

八、有給書記二名以上ヲ置クコト

九、文學家藝人其他篤志家ニ廣ク贊助ヲ受クルコト

十、經費ノ餘剩ヲ以テ遺物ノ蒐集ニ努メ廣ク寄贈ヲ受クル事

十一、大阪名物タル淨瑠璃道ヲ獎勵シ且ツ文學思想ヲ鼓吹スル爲時々講演會ヲ開キ雜誌ヲ刊行スルコト

十二、工事其他本會一切ノ事務計畫ヲナス爲市内五新聞社ヨリ左ノ諸氏ヲ評議員ニ囑托セリ

大阪毎日新聞社 角田 勤一郎氏 香川 倫三氏

大阪朝日新聞社 木崎 愛吉氏 岡田 茂馬氏

大阪日報社 加藤 瓢平氏

大阪新報社 富樫 萬次郎氏 宮北 健氏

大阪時事新報社 中山 重孝氏

十三、前回並ビニ當會ニ於テ選定シタル役員左ノ如シ

會長 土居 通夫氏

副會長 緒 方 正清氏

會計監督 渡 邊 庄助氏

十四、紀念碑ヲ四天王寺境内ニ建設スルコト

十五、文庫ヲ大阪圖書館内ニ附設スルコト

明治四十三年一月

近

松

會

七

發起人 (いろは順)

磯野良吉	濱崎健吉	堀内謙吉	土居通夫
殿村平右衛門	豐竹呂昇	千草安兵衛	緒方正清
緒方銑次郎	岡崎榮次郎	渡邊庄助	渡邊修
渡邊眞治	片岡仁左衛門	加藤喜作	加藤太治郎
川口音吉	横田孝史	田中市兵衛	谷新助
高木善兵衛	田口謙吉	竹本攝津大椽	竹本大隅太夫
田附政治郎	那須善次郎	長尾善兵衛	中村雁次郎
中村秀五郎	梅原龜七	井上德三郎	野口茂平
大谷竹次郎	大谷音吉	太田半笑	八木與三郎
山田留吉	柳廣藏	山内卯之助	松井伊助
古川音吉	寺田市郎平	阿部彦太郎	朝日山四郎右衛門
西園寺龜次郎	木津谷吉兵衛	貴志米吉	湯川玄洋
白井松次郎	島德藏	澁谷正十郎	鹿海文助
芝鶴太郎	芝甚太郎	廣瀬宰平	日々庄兵衛
日々野芳次郎	森下博		

●會員名簿

○本會役員

會長 土居通夫	評議員 木崎愛吉	評議員 中山重孝
副會長 緒方正清	同 岡田茂馬	同 井上金之助
會計監督 渡邊庄助	同 加藤瓢乎	同 小野利教
評議員 角田勤一郎	同 富樫萬次郎	同 中村米吉
同 香川倫三	同 宮北健	同 和田次郎

○特別賛助員 (いろは順)

室田八十吉 上羽重吉

○賛助員 (いろは順)

石川文右衛門	石橋爲之助	一花一華	伊井蓉峯	石田鐵米
今井正太郎	伊原青々園	濱村貴鳳	濱村貴若	長谷川如是閑
原田夢龜	濱和助	西村天因	西川滴翠	本多碧波
土井竹次郎	豐澤廣助	豐澤團平	豐澤新左衛門	豐澤猿絲
豐澤廣作	豐澤龍助	鳥居素川	尾上多見之助	尾上卯三郎
岡野告天子	小野稻洲	尾上喜久太郎	小笠原豐涯	渡邊霞亭
若林翁	和田天華	脇田小鳥	片岡我童	片岡太郎

金崎杏葉	加藤半紅	梶原綱太郎	上總天香	吉田兵吉
吉良霞村	吉田笠雨	竹本越路太夫	竹本染太夫	竹本南部太夫
竹本津太夫	竹本七五三太夫	竹本春子太夫	竹本伊達太夫	竹本大島太夫
竹本長子太夫	竹本錦太夫	田村千歳	田中半兵衛	多田たつ
高原蟹堂	田井羊公	高松正道	武富瓦全	高橋愛川
外海鐵次郎	鶴澤清六	辻村秋嶺	露谷句水	根本吐芳
中川蘆月	中神鹿城	永田好三郎	中村成太郎	中村幹尾
中山光次	村井松葉	村田正雄	向井藻浦	野澤吉兵衛
野澤吉三郎	大森痴雪	大江素天	熊谷幻華	熊田重人
久保田小塊	山内愚僊	柳川正直	松本重太郎	牧放浪
松瀬青々	松阪青溪	松本正之助	古内隈川	藤永寅之助
近藤泥牛	小島白潮	後醍院盧山	幸田成友	江上朝霞
嵐璃珪	嵐璃德	赤松林作	饗庭篁村	秋月桂太郎
齋藤義調	齋藤溪舟	齋藤弔花	菊地三巴	桐竹紋十郎
桐原捨三	木谷傳次郎	喜多村縁郎	行友李風	湯淺月迷
溝江高信	三木三水	水谷不倒	水落露石	實川延二郎
清水又右衛門	實川菊次郎	久松定憲	樋口吾笑	森岡騷外
瀬戸半眠	(以下次號)			

● 本會成立の次第

水谷不倒氏が大阪毎日新聞社に在るや、銳意近松研究に従事し、攝津神崎なる久々知廣濟寺内の巢林子墳墓を江湖に紹介せられ、爾來士人の展墓するものあり。偶、去四十年秋木崎好尚氏近松會の名稱の下に、幸田、高安、水落、松崎、根本、外十數氏と一日の雅遊を廣濟寺に爲しき。土地の有志家茲に於てか感奮する所ありて、小野利教氏に因りて木崎氏に圖り、次で岡田翠雨氏の贊助する處となるや、岡田氏熱心に斡旋の勞を執り、土居、緒方、谷、田中、廣瀬、長尾、殿村、渡邊外二十餘氏の賛同を得て、四十二年六月堺卯樓に會し、會長、副會長、會計監督の人選を行ひ、爾來尙有志を説き、遂に其年十二月十九日を以て第二回發起人會を灘萬樓に開き、趣意書を作り、規則書を定め、市内、朝日、毎日、新報、時事、日報の五新聞社より九名の評議員を囑托し、會務及諸計畫を一任することゝなれり。(趣意書會則及決議書載せて前項にあり)爾後追々發起人の數を増加し、遂に現在六十餘名に達するに到れり。時恰評議員中岡田茂馬氏主として會務を見たりしも、氏春來病氣の爲漸く會務の延滞を來すに到れり。時恰かも、東京早稻田大學に於て、近松傑作全集刊行の舉あり。六月中旬を以て。其一卷を出せり。巢林子の墓斯集に因りて、更に洽く紹介せられ、さなきだに聲高き近松の名は、層一層に其の聲を大にするこゝとなりぬ。然も、世上奸譎の徒、此の間に乘じて私利を營まんとするものあり。元より公正なる標榜

によりて樹てられたる、本會に於て、毫も痛痒を感ずる所にあらざると雖も、往々世人をして誤解せしめざるを得ず。於之小野利教氏をして、岡田氏に代りて會務を擔當せしめ、事業の進歩を圖らしむることゝし、先づ機關雜誌を發行して、本會の趣意と、事業とを江湖に告白し、大に賛助を求むることゝなせり。以上は本會成立の徑路と、順序とにして、一面また小沿革史とも云ふべきなり。記して其の次第を明にせんとす。

會 告

近頃市内に於て近松講會と稱する賴母子講又は近松大會と呼べる淨瑠璃會を創設し頻に本會と關係あるもの、如く吹聽し爲に疑惑を懷かる、向々有之哉に聞及候處右は本會のすゝしも知らざる所にして毛頭關係これなく候間此旨御承知被下度茲に告白仕候以上

明治四十三年七月

近 松 會

本誌初號創刊の爲體裁其の他總て不整頓なれども次號よりは精々完備を期すべく且藝評欄を設け素黑兩界の評をも物すべし、斯道の熱心家特に本欄に係る高見は陸續寄稿せられむことを(編者白)

聲曲類纂所載



祝 詞

青 灣 岩 田 義 玄

近松會雜誌成る。美文謠誦これに依りて。ますく勃興せん。巢林子像賛に曰く、勻翰譚歌の妙、少牋綺語の神、ご本誌亦其流乎。希くば記事艶にして濫れず、雅にして偏せず、中を履み、號を逐ひ以て斯道鼓吹の一助たらしめられんことを。聊か蕪辭を草して祝詞に代ふ。

○近松會雜誌發行を祝して

去程にその後までも名は朽ちず

千代も榮にむちかまつの會

竹本攝津大椽

近松會雜誌發行を祝す

竹本大隅太夫

近松會雜誌の發行を祝す

朝日山四郎右衛門

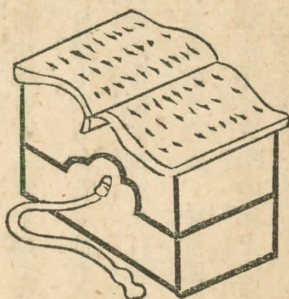
○初發行を祝して

近松のふかき緑の初しほり

竹本叶太夫

染めて枝葉のこもにさかぬむ

聲曲類纂所載



論 說

近松會雜誌の發行に際し聊か近松を論じ
更に藝林の諸子に及ぶ

緒 方 相 山

近松會は夙に成立したり。近松會の機關たる雜誌第一號は乃ち本日をも以て發行せられたり。而も其目的の恰かも其名稱に於けるが如く、近松門左衛門の事蹟を探討して其祀を起し、其著述を研究し、且其前後の文學と併せて之を攻究し、幾多廢佚せられたる戯曲を復活せしむると同時に、一面は國民的日本文學の普及を圖り、一面社會的藝林の頹勢を挽回するにありと云ふに於て、其舉の快、其事の美、遂に門外の子を驅つて之を歡迎せしめ、且其前途を祝福せざる可からざるに至る。蓋し近松の才華と博識とは

其著作の上に於て、英のシェークスピア獨のゲーデに酷似し、而も和漢文の樊籬を突破して、雅俗一丸、能く之を圓熟に、又能く之を調勻に、一種優美勁健なる一體を作成し、之に依つて自由自在に國民的思想を發表し、其著作の歴史的に、將た社會的に、克く人類性情の機微を道破して翻つて人類の肺肝に刺り、轉た後人をして容易に感奮せしむるの致す所なり。

抑も貞享元祿の天地は徳川五代常憲院の國民思想の自由を開放したるに依りて、大満盈、大得意の空氣を以て充され、恰かも東照宮の生前に獎勵したりし學藝尊崇、逸書上版の擧と呼應して、自然的に智識の分配となり、學藝の興隆となる。即ち藤原惺窩、林羅山の宋儒性理の學は一進して中江藤樹の陽明學となり、更に熊澤蕃山の經濟學となる。伊藤仁齋は經義的復古學を標榜し、荻生徂徠は文辭的復古學と稱して、一方に經綸學となれり。山崎闇齋の垂加神道、僧契沖、加茂真淵等の國詩國文に於ける古學、後藤艮山の醫學古法等各々一旒を樹て、垂帷の裡に相下らず。其狀猶元龜天正の交六雄八將の干戈を執つて旗鼓の間に杆格したる如し、而して江府の風潮は西漸して北村季吟の宮廷文學となり、貴族的文學の主權たりし儒學の中樞が却つて江都に移りたると共に、學者の學問は多く政治家的の學問となり、文人的の者却つて武人的となり、來世の者遂に現代的となり、其特種的なりし者は寧ろ普通的となりて下層に浸入し、茲に平民文學の向上進化を促して芭蕉、西鶴輩出し、凡百の工藝美術は鬱然として崛起したり。彼の武人的狩野家の繪畫の漸く和勻に傾くと同時に公卿的土佐家の繪畫も亦柳營に召出され、英

一蝶は現代的寫實を旨とし、狩野の格法より脱出して題を人生に求むるの浮世繪を作し、淺妻舟を描きてあさましき浮名を八丈島に流す。而して從來茶番狂言の如かりし日本演劇は初代市川團十郎の荒事となりて悲壯なる演劇を眞成し、東に紀伊國屋文左衛門の驕奢を見て、西に淀屋辰五郎の豪華を謳ふあり。將軍親しく今様風流の舞を見て、靈元上皇猿樂に親しむ。

夫れ此の如く當時の日本は四民佚樂に餘念なく、一方に制度能く揚りて文物燦爛、榮耀千古を曠うしたる如きも、放佚自在の結果として奢侈の風益々盛となり、麻絲にて結ばれたる頭髮は越前の元結と換りて、伽羅の油に本多鬘、鯨尺二寸五分の女帶は一躍して四寸五寸となり遂には丸絹を腰に纏ふ。外出の覆面は男女倒様となりて、女は露面に厚化粧を誇り、男は紫の覆面が否らざるも深編笠の爲體、而も口を叩きて徒らに諸行無常と呼び、盛者必衰と唧つ事あるも、其花に對し酒に向つては、現、他愛もなかりし。一ちらり／＼と花めづらしき雪の振袖ちらと見た「云々の謠は實に當時男一匹と云はるゝ者の希望の一斑として此等の揷四とならざりし者なかりき。

要するに、元祿の江戸は一大舞踏場たりしなり。否日本を擧つて、一大舞踏場化せしめたるなり。花舞ひ、蝶飛んで人愁へず、而も歡樂の極哀情多く、半面の光明は即ち半面の暗黒にして、人は人生の眞味を味はざる可からず、花の酔さめやらぬ間に一葉は落ちにき、財政の窮乏、貨幣の改鑄、上下の困苦昨日の極樂は、今日の穢土、江戸の歡樂郷も限りある運命に、人は自から其無常迅速を嘆ぜざる可から

す。人生を題目として人生を翫味すべき秋は來にけり。人間の哀歡に對する切なる同情は自然的に煥發せられたり。近松門左衛門、渠の才華は實に人生詩人として此千歳一遇の時に光明を放出したるなり。僧を學んで成らず。一條家に六位の官人として尙就らず。市井に放浪して尙成らざりし。赫々たる功名噴々たる聲譽の身に伴はざる彼が其成らざる所以の者は天稟の才華に伴ふ目的の大なりしに歸すべし。彼れ桑門に甘んずれば優に塵外に在つて家を爲すべき資質あり。官人に甘んずれば殿上を得べき見込あり。其之を甘んずる能はざる者は其目的の他に存すればなり。借問す其目的とは果して何ぞ。他なし、彼は自ら人生の測量師たらんと欲したるにあり。左れば彼の題目を人生に求めて想を定め筆を下すや、唯一幅人生の縮圖を爲すにありて、聲譽、人情、歴史的、社會的、宇宙間の森羅萬象一として通貫するを許さず。之れ其當初に成らざりし所以なり。而して鍛鍊百出、推敲千杵、遂に近松文學てふ爐轡を造り、家を成すに及んでは、粟散の萬象の有藏無藏自ら剖いて筆に入り來る。「さても見事なおつゝ馬の玄やん／＼と響く轡の音に和して謠ふ小室節に對しては直に追分の越調に和し、與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀さしじや、玄やんとせ與作」との小唄を假つて直に「丹波與作」となり。人生の迫害に對する恩義、情慾の恐るべき機微を達觀して「博多小女郎浪枕」なる者立ちに就る。律義なる半七が愛の成功を希望して、委託物費消罪を犯したる者取つて「長町女腹切」となし、社會的戯曲の破題をなし、小心なる徳兵衛と同情に富みしお初どが、耻辱に對する消極的義憤は愛に對する恐怖心を加へて情死を餘

儀なくせしめたる者「曾根崎心中」に非ずや。「心中二枚繪草紙、生玉心中、今宮心中、卯月の紅葉」等亦耻に殉じたる美的表情の作にして「戀八卦昔曆のおさん茂兵衛と、重帷子に於ける鎗の權三とおさる、又堀川波の鼓なるお種等は過を悔たるの結果、心中天網島は小春と治兵衛とが愛と道徳との一致に對する希望の爲に情死したるを説き、女殺油地獄の與兵衛は借金を返さんとするの餘途にお吉を殺害し、冥途飛脚の忠兵衛は衆人稠坐の中に辱かしめられて依託金の封を切り、歌念佛の清十郎は讒謗に對し激怒したる結果人を刺殺したるにありて、此等の社會的戯曲は能く當時に於ける男女兩性を見解して餘蘊なく、而も一面を彩る戀愛の如きは材を極めて高潔なる者のみに執り、云はずして神聖と頷かしむる事全然方今の自然主義と反對にして、深く世道に意を注ぎたるが如し。而も其最も大なる人生希望の主因とも謂つべき愛に對しては極力之を描出したる者なるべく、子は父の爲に其罪に服するを避けず、父の同僚の爲には盜名を負ふも辭せざる如く、兄の爲には自ら死を祈り、主人の爲には身命財産を抛却して惜まず。梅川が小判の上に落し、涙の玉、お夏が父の呼ぶ聲に「父は子を呼ぶ夜の鶴、我は夫よぶ野邊の雉子、……道も心も眞くら／＼くる／＼／＼、狂ひ亂れ泣亂れ」て去りたる其心に露塵程の汚點を留めず、全く「世間に多い心中も銀と不孝に名を流し、戀で死るは一人もない」と云傳へたるレコードを破却し、靈界共棲てふ極めて崇高なる觀念を以て之を道破したるが如し。

(未完)

近松會雜誌の發刊に就て

鈴木文雄

英にシェークスピアあり。獨にゲーテあり。共に一代の文豪にして、長へに國民の誇たり。我國の近松巢林子はシェークスピアの兄たり難く、ゲーテの弟たり難く、我大和民族の忘るべからざるの一大文士なり。彼が豊富なる業績は、能く後人をして其の技量の凡ならざるを驚歎せしむるに足る。

聖明の時世、國威の宣揚と共に、文運も亦興隆し、苟も文字を解するものは、所謂文學趣味を口にせざるなき今日の有様は、實に空前といふも不可なからん。是れ我國は東西の文明を調和し、更に世界の文明を化醇するの天職を負へるが爲ならんか。是に於てか溫故知新の事、亦自然の趨勢といはざるべからず。我近松氏の如き文豪の續々として研究せらるゝは所謂當世の要求に應ずるものといふべし。曾て普魯西が獨逸聯邦の盟主となつて、佛蘭西に勝ち、獨逸帝國を建造するや、獨逸國民が自ら知り自ら信ずるの力、頓に増加し、千八百八十五年六月二十一日ゲーテ會を發起し、盛に獨逸文學の鼓吹に勤むるに開けり。我近松會の起るも亦偶然にあらざるなり。

由來、我國民は武勇を尙び、文事を好むの性質はありたれども、中世以降國內の擾亂を接するや、文學は漸く國民に忘却せらるゝに至れり、貓額の地、血を以て爭奪するの時世に、誰か安閑として理想を

研究するの餘裕あらんや。誠に時勢の然らしむるところ、如何とも爲し能はざりしなり。幸に近松氏は徳川幕府の初期に生れ、文運勃興の機運に際會して、其天才を發揮することを得たれども、彼は幕府時代の一人なり。遂に大發展を爲す能はざりしは誠に惜むべし。

抑も、天地開闢以來、君臣の分定まり、神聖にして侵すべからざる天皇を奉戴し、臣民克く忠に、克く孝なるは、我國體の精華にあらずや。然るに彼れ幕府なるものは一時の權道よりして生れたるものなれば其時代の人心が、如何に權道を踏まざるべからざりしかは推知するに難からず。

試に近松全集を繙きて看よ。其記するところは、多くは中流以下の痴情にあらざるはなし。近松氏は曾て桑門に入りしが、還俗して身を淨瑠璃界に投じたる人なりといへり。果して然らば、彼は當時中流以下の所謂世人なるものが、無學文盲にして高尚なる理論の入り難きを看破し、特に卑近なる情事を因縁として、勸善懲惡の教を宣傳したりとも見つべし、然れども彼は幕府時代の人なり。權道の世の文士なり。而も其從事するところの淨瑠璃なるものは、之を公衆の面前に演せしむるものなり。嗚呼頭上に權謀高壓の政策あり。而して相手とするところのものは無學文盲なり。彼れ如何程に苦心せしやは察するに餘りありといふべし。然れば彼は記せんと欲して記する能はず、言はんと欲して言ふ能はずして、已みしもの多かりしならん。是れ余が近松氏を思慕すると同時に、彼が時世の可ならざりしを惜む所以なり。

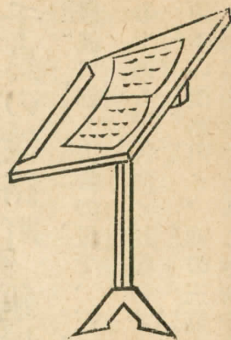
今日は然らず。王道坦々として、樵夫牧童も能く文字を解するの時に當り、泰西思想の流弊も亦漸く我國に入り、或は目前の便利に三千年の國風を棄つるあれば、或は生硬の空理に開闢以來の國體を忘るゝあり。我國には千有餘年を経て、我國體に調和したる夫子の道もあれば、世尊の法もあるに、基督の名に偏して、自ら矛盾煩悶の域に陥れるものもあり。嗚呼此等の衆生を濟度して、大日本帝國民の大理想を發揮する大文豪の出づるなきは、誠に明治昭代の耻辱といはざるべからず。嗚呼我近松會員諸君、諸君が近松會を發起し給ふや、徒らに近松全集を經典視し近松宗を宣傳し給はんとの趣旨にはあらざるべし。されども波羅門より出で、佛法は在り、舊約よりして新約は生れたり。近松會も亦明治文豪の孵卵器たらざることをなかるべし。余は之を近松會に望むこと切なり。



下手役者馬の脚さへ踏ちがへ

(川柳子)

聲曲類纂所載



講筵

忠兵衛 冥途の飛脚

青瑠璃漢

これは云ふまでもない、近松翁の作で、正徳元年三月の初興行に大當を得たことは、先刻諸君の御承知、何分大阪の出來事が骨子と爲つて居るから、今も盛んなる語物となつてをる。翁が圓熟期の世話物作品中の精華と數へられるも道理である。然して、三段の中前二段は、原作のまゝで、新口村だけは菅專助の改作「傾城戀飛脚」のを語つてをるが、余は全部共に、原作の儘で、講話をしやうと思ふ故事用語などの解釋も淡泊にして、畷々しい事や、六つかしい事は一切いはぬ。又假字づかひなども原作からして非常に誤りが多い。これだけは訂正して置いて、文法上のものは、聲曲音調に關係する

ことであるから、敢て直さないで、すべて元の通りにしておく、敢て記者の勞を厭ふのではない。さて是よりいよ／＼本文に取りかゝる。

身をつくし。難波に咲くや。このはなの。

身をつくしは落漂申である。水の深さを知る木標のことで、今も當市の記章に用ゐてゐるが如き形のもので、難波江に建てゝゐたから、古歌にも、身をつくしても逢んとぞ思ふ」など、詠んでゐる。此處の枕の文章には、全く難波の冠詞として用ゐて在る。咲くやこのはなは、王仁といふ博士の「難波津にさくや此花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」と詠んでゐるので、梅の花の事である。國學者は櫻の花であるといふが、そんな事はどうでもよい。

里は 三筋に。町の名も。佐渡と越後のあひの手を。

通ふ千鳥の淡路町。龜屋の世繼忠兵衛。

里は難波、即ち大阪の里で、三筋は街衢の通りの事で、下のあひの手を云はんがために、三弦琴にかけたのである。佐渡と越後のとある所は、文法が違つてゐるが、聲曲のことだから咎めぬ。さてそのあひの手の淡路町と、前の三筋に合した所はうまい。通ふ千鳥の淡路町も、淡路島通ふ千鳥のなくこるに」とある古歌に據つたのであらう。淡路町の三度飛脚屋の主人龜屋忠兵衛、これ本篇の主人公である。

ある。此の淡路町とあるのは今の内淡路町であるさうな。

今年二十のうへはまだ。四年以前に大和より。

忠兵衛、今年二十四になる。四年前に、大和から入家したを、二十のうへはまだ四年以前、とつゞけたのは、實に巧ないひかたでないか。

敷金持て。養子分。後家妙閑の介抱故。

敷金は持參金である。養子に來る時、若干の持參金があつたのである。妙閑は姑であつて、先代忠兵衛の女房で、後家になつてから、妙閑と改名したので、この後家殿が、若年の忠兵衛を萬事に介抱、即ち顧問役となつて世話を焼くから、

商賣巧者。駄荷づもり。江戸へも上下三度笠。

商賣巧者は、妙閑の仕込で、家業の駄引上手になりしこと、駄荷づくりは、荷づくりの指圖もよきこと、さて駄荷は、馬に負はす荷物で、慶長年間鴻池屋善庵が諸白を江戸へ下すに、馬に積んで適當な重量を四十貫と實驗の上から定めたのを、後世一駄と云ふのである。江戸へも上下三度笠は、江戸へ三度も忠兵衛が商用で往復したといふことをほめかしたのである、三度笠とは三度飛脚の被る笠のこと、三度とは馬の三途の義とも云ひ、相馬經などの説があるが、一日に三度の江戸下り飛脚を差

立てるといふだけから、その店を三度宿といつて、略して三度といふので、飛脚も略して、やはり三度といふのである。本文の後に、度々出て来るから今此所に説明して置きます。

茶の湯。俳諧。碁。雙六。のべに書く手の角取れて。

茶の湯、俳諧、碁、雙六は、正徳時代に流行の遊藝であつたものであらう。のべは紙の名で、すのべなどいつて、上等の用紙であるが、當時鼻紙などにも奢つた連中は使つたらしい。そののべ紙にかく當世男となつて、大和生れの圭角はいつかされて、粹漢となつた。

(一)酒も。三ツ四ツ五ツ所。紋羽二重も出ず入らず。

(二)無地の丸鰐。象眼の國細工には稀男。

一は、二三四五の數字をたくみに取合せて、忠兵衛が浪花漢の粹人となつて、酒も三四盃は呑む、五つ紋の羽二重も出ず入らず常住に羽織に着るといふこと、二は、脇差はひねつて鐵無地の丸鰐の町人差をさして、欄や、鰐の象眼細工にも、生國の土くさき所のない、垢ぬけのしたまれ男であるとの意、これで忠兵衛の風采は知りわられることである。

色の譯知り。里知りて。暮るを待ず。飛ぶ足の。飛脚宿の忙しさ。荷を造るやら。解くやら。

色の諸譯も知つて、遊里の味をも知つて、日の暮れるのを待ちかねて、悪所に飛んで行く、その足の飛脚屋と續けて、忠兵衛が店の多忙なるさまを想像させる。荷造りするものや、荷を解くものやら、ごつたがへしの店頭の光景は、目前に見るやうではないか。

手代は帳面算盤を。おく口ごもにどや／＼と。

手代は帳面を附けるやら、算盤を置くやらと、置くど奥をいひかけたうまさ、この掛ことばについて、他日別に云ふつもりである。さて奥の間も、門口もどや／＼と混雜してをる。

千萬兩の遣りくりも。筑紫吾妻の取り遣りも。居ながら銀の自由さは。一分小判や白銀に翼の有るゝ如なり。

前のごや／＼とせんまん兩と受けたのも、亦いひかけであつて、遣りくりもつくど、筑紫へ又かけたのである。九州關東かけて、手廣き取引をしても、すはつてゐながら、金銀の自由に融通の利くことは、一分銀や、小判などに羽が生れて、飛ぶやうだと、龜屋の繁昌を見せておる。

町廻りの狀取り。立歸つて夫々。留帳つくる所へ。誰頼まう。忠兵宿に居やるか。案内するは。出入の屋敷の侍。

市内の得意廻の手代が歸つて来て、夫々と留帳へこゝも夫々さめ帳、書留めて居る所へ、誰ぞ頼まうた

のまうと案内を請ふて、主人忠兵衛は居るかど問ふから、誰かと思ふて出て見ると、始終御出入する御屋敷の侍であつた。

手代共。懇懃にヤア是は甚内様。忠兵衛は留守なれば。お下し物の御用ならば。私に仰聞けられませ。

お茶もておじやこあひしらふ。

手代らは、ていねいに迎へて、ヤアこれは何方かと思へば、甚内様でござりましたか、ようこそお出下されました。さて主人忠兵衛は宿に居りませぬが、此處は原文留守なれどあるべきなり。何ぞ江戸へお下になりまする御用ならば、どうぞ私に仰つけられて下さりませ、と手をもみ。お辭儀ベコ。と遣る所であらう、さうしてこりや丁稚共、早くお茶を持つて来いと、あきりにお追従をいつて、もてなす所である。あひしらふは、あしらふと云ふのと同じである。

いや。下りの用はなし。江戸若旦那より御状も来た。はお聞やれ。押披き。

否々、江戸へ下す物の用事ではない。江戸御邸の若旦那様から、御手紙がまゐつたのだ、サアこれを拜見せいと手紙サツとひろげて、こゝはお見やれとあるべき所だ。物を見せるのに、これを聞けと

は、普通に云はぬ。こんな理屈をいふと叱られるかも知れぬが。

來月二日出の三度に。金子三百兩差登せ申べく候。九日十日兩日の中。其地龜屋忠兵衛方より。右三百兩請取。内々申置候事共。埒明申さるべく候。則飛脚の請取證文此度のばせ候間。金子受取次第此證文忠兵衛に渡し申さるべく候。

以上は手紙の文句である。成程甚内が讀むのを手代が聞けば、はお聞やれでもよい。三度とあるは三度飛脚の略稱、で差登せ申べくは、送れといふこと、内々申置は、内々に其方に（甚内）申付けおいたこと、飛脚の受取證文は、若殿の手形で、金子引換券でござらうか。次の此度のばせは、こんどそちらへ遣るからといふことである。

（以下次號）



聲曲類纂所載

雜 録

近松一中節

東京 伊原青々園

近松の兄が都一中なりとは萬象亭が「反古袋」に記せる珍説なり。此のこと眞事と信じがたし。されども近松の作が今日に於て義太夫節よりも寧ろ一中節に多く残れるは大に意味の事なるべし。近松が義太夫節の爲に作りし淨瑠璃はいと多し。而も其節の残れるは誠に些し。残りても「紙治」の如き「梅忠」の如き「夕霧」の如き大かた後の作者によりて修正せられ、「原作」とは違ひしものなり。手近の「宇治文庫」、「都羽二重」などによりて、一

斯界の巨匠を以て推されたり。資性篤實にして、何事にも用意周到、幼少より轡轡不遇、文字を學ぶひまとてあらざりしも、好んで文書に親しみ、絶えず淨瑠璃本を讀めるより、自らその化育を受けて、多少文章を解したるものと見ゆ、自ら筆を執つて己一代の來歴を草したるもの、終に積つて三十冊に及び、然もその筆致老實にして頗る理義に通じ、當時の風尚流俗を窺ふに足るものあり。其趣味も亦多方面にして、或は時事を論じ、或は俗習を諷するの外、景勝の地に遊んでは、その山水を描寫し、僻遠の地に入つては、その風俗を紹介し、頗る世道人心を益せんと努めたるの痕も見ゆるなり。而してその書冊の間には、自筆の繪畫を加へ、高山植物の標本を貼付したる所もあり。後の淨瑠璃史を編む者に取ては、實に好個の資料たるべく、其所行宛然讀書人の如し。若し斯の人をして學界の人たらしめば、或は一個の好文士

中節に残れる近松の作を見るに、「お夏笠物狂ひ」「道行三度笠」、「丹波興作」、「業平河内通」、「天の網島」、「根引の門松」、「源氏烏帽子折」などあり。よし一中は近松の兄ならずとも、近松の作が彼の曲によりて盛んに傳へられたるは明白なる事實なり。此の點に於て近松を崇拜するの士が義太夫節熱心家にのみありて、一中節の末流に絶てなきを余は不思議に感ず。

六代目染太夫自傳

六代目竹本染太夫といふは、五代目染太夫（後に越前大塚）の門弟にして、前名を實太夫といひ、今の竹本叶太夫の養祖父に當れり、五代目歿後其名蹟を繼ぎ、文久、元治の頃には、小堀口の大師匠（長門太夫）五代目春太夫等と共に比肩して、博勞町稻荷社内の操座にて常に三段目ものを語り、

を得たらんも知れず。予過ぐる頃叶太夫より此の書冊を借覽して、坐るに景慕の念を催し、同好者に對して推奨措く能はず。昨夏大阪大火に際し、彼の自傳中文政十二年江戸大火の記事ある一節を抄出して、朝日新聞紙上に掲げたりき、今や本會雑誌の刊行により、爾後續出して非文人に似氣なき殊勝の心掛を紹介せんとす。藝人にして文事の心掛ありしは、二代目團十郎、五代目團十郎、七代目團十郎、中村仲藏（秀鶴）等の外餘り多からず。特にかゝる大部の編著ありしは、秀鶴の「手前味噌」及び長門太夫の「淨瑠璃大系圖」の外には予の寡聞なる未だ曾て之を知らざるなり。

岡田 翠 雨

一、師匠染太夫に従ひて

實太夫江戸行の事

文政十年二月二十日、此時實太夫は三十一歳（伯

父の方より喰通ふて師の家に日勤して居たりけるが、師の宅は越後町狸横町妙見裏なりしが、其時には古人となられし四代目の孫房石屋染太夫三は後家茶屋をして、いづみや、おちへとて、あつばれ泉孫の家相續して同所越後町、處は師の染三宅近所にて、同家同様の因なり。爰に又師匠の内實おつる（二歳）の男子松之助と云ふ子あり。すこしいりわけあつて、夫婦不縁となり、實子松之助には喰料を添へ離別の、おつるにあづけおき、獨身となつて、江戸下向と相成りける。扱て又師の江戸行の供を望者、我一と多かりしが、實太夫は師の心に叶ひしゆゑ此供實太夫ときまり居るは、實太夫大に此うへなく、直様伯父を始め兄姉へ此事を語り、あるひは友達衆へも暇をのべ、程なく吉祥日にいたり、實太夫は師の馬のり荷物を預り、一日に三十石夜船にて城州伏見へ着す。それより、實太夫は伏見の船宿小道具屋に泊り、

師匠の登り來らるゝを待ちしが、宿屋の我居間片脇の座敷より知らぬ若男何角頼度事ありとて出來る者あり。此節大阪芝居、尾上多見藏は、若かりし時から、町々の女中娘達おびたいしくヒイキをして、諸芝居ま事ににぎわしき事なり、其中に三休橋筋久太郎町なる障子屋の娘は多見藏をヒイキより、いかなる事にや語ひあひて、其身をまかせしを、此事町中一ぱいにひようばんをして、立ても居ても、色がましい事を、只障子屋／＼と云ひける。彼の障子屋娘の兄嘉吉と云ふ者、妹の事をうはさせられるのを、うたてく我家の店には障子の細工をも仕てゐられず、此頃自家出をして城州伏見迄來りて、江戸表にでも身をかくすべきなれ共路銀なければ、さまよひしに、爰にて染太夫江戸行ときいて、染太夫にすがり添て、江戸へ頼み行たき心にて、此座敷へ出來りしなり。扱て嘉吉は、實太夫に右のまだらくをかたり、江戸表へ

供をいたさせくれ度事段々のたのみに、實太夫はめいわくながらともあれ、今に師匠も當地へ來られん、其上の事といふうち、や／＼しばし程すぎて染太夫は大阪用事調へ出立して、宰領江戸駕籠屋金助に案内させて、當宿に着しける。師弟面段の上、實太夫は彼の嘉吉が頼みの入りを語りしが、染太夫はきき嘉吉をあはれみ、爰よりして嘉吉を我供同やう四人連にて、伏見を出立して、道中筋へとあゆみ行。かくて染太夫此嘉吉をいとしんせつにして、道中諸事をまかのふて遣はし、後に江戸着の上知るべをもとめ、其地成る障子細工の家へ手間取り奉公に遣はせしが、二ヶ年ばかり勤しかば、大阪には障子屋／＼といふ取りざたもうさる時分をさつし、今迄勤居たりし親方へ程よくして立別、染太夫に一禮をのべ暇を乞て、大阪へ立返れり。其後師弟其嘉吉に大阪にて合見せず。扱て道中これ迄太夫役者は、雲助に金錢をねだられ

取らるゝ事まゝあるによりて、師匠は此の事をふかく案じ、此の事江戸芝居の衆へ咄せしに、江戸金方は鹽瀬新次郎とて紀州御用の家なれば、此人より道中の所帯刀をゆるされ、紀州御用にて通路致されける。されば供に附添ふ家來といふは弟子實太夫なれば、道中のよび名を喜平とよびなしければ、風俗はんとそくはぬなりがつこふにて、一寸見たる時は飛脚の出來をこないの如くなり。師匠をよぶ言に、旦那／＼ともいひ、又は親方／＼とも云しが、いつの程にやら、打わすれ、御師匠さんと云て、まじりたり。にわかにか來（嘉吉と云ふ）が一人できたれば、此風俗は又格別にて、そぐはぬ取なりなり。只一文なしに飛出せし事なれば、旅装束もそこそこ、まるの堅人の職人にて、年もいまだいさげなく、この時嘉吉が、腰にさいたるは銀子三匁五分計の小供ざしの朱ざやの脇ざしなり。ま事に不都

合なる風俗なり。まかし何分に御帳面が紀州御用
にそういなく、物になれたる江戸の金助が宰領な
れば、ぶなんにて、道中はすれども、此節春の時
分にて大名の御通行を上げれば、こちら武士の
出立にて何角とうつとしく思ひ、こわくながら、
御大名の行列に扱つかくれつ、あゆみしが、なさ
けなき事は、毎夜泊りくには、よろしき宿を御
大名にとられ、宿屋よりさし宿へつきやられ、と
んどよろしからぬ宿やに泊りし事、うたてけれ。
さても雲助のうれひはのがれても、武士すがたの
ひとくらうして、よう／＼三月二日江戸本石町四
丁目伊勢屋宇右衛門と云ふ泊り宿に着しける。

二、師匠染太夫江戸

旅宿伊勢半逗留の事

文政十丁亥三月二日師弟ぶなんに東都に着し、芝
居仕打のさしづにて、伊勢屋宇右衛門と云ふ泊り

宿屋へおちつき、當分は此泊り家よりして、芝居
へ出勤する。扱て又芝居は當春正月、興行のつも
りなりしが、去冬二丁町の出火に此芝居類焼にお
よび、普請延引してよう／＼三月興行となる。則
芝居吹屋町肥前座にて、座頭竹本津賀太夫、小田
館の通の成、師匠染太夫は附物關取二代鑑を勤ら
れ、ここのほかひようばんよく、弟子實太夫此度
當所へくだり立の事なれば、役場わたらず。其身
の役なかりける。扱て師匠は芝居役場を毎日つと
め、せひとも目見えをせねばならぬむき／＼あり。
又京都めづらしければ、ヒイキの旦那たちによば
れ、名所／＼遊所遊參遊船并に芝居かはり、げだ
いあるいは、總無常、師の事我事をかきませて、
是に寫せと、此書前後慶長のころより、實太夫後
年改名し、二たびして、出世におよぶまで、凡百
七八十年の記録ゆゑ、くだ／＼しき事は取りのけ
て、あらましを書つたふるのみ。されば芝居場か

ずも出をろひ、師匠ぶたににもなれ、殊の外ひよ
うばんよく、心おちつき、目見えに行方は、第一
此度の金方にて、鹽瀬新次郎様、并に小池孫市様
并に芝居近所茶屋れん中そこ爰へあいさつに行た
るが、中にも鹽瀬様にては、過分の金子衣服をい
たいき、猶大轆ふたさを下さるやくそくをして返
りしが、さつそく兩三日に彼の轆芝居の表にたち
て、大いにぎはいとあひなる。それより又、小
網町釜屋傳兵衛様といふ人、芝居を見物せられし
より、御ヒイキになり、隣町峯龍亭へ師弟連ら
れて、酒わんの所へ、角力の高砂、龍川、兩關を
相よせられ、當人共近付になり、または日をおき
て、右の釜傳様連にて、淺草参り、あるひは後に
兩國花火見物、并に同所青柳亭行、向島行、江戸
一のうなぎ屋行、上野行、二十六日夜船にて行、
猶後にいたりて、大雪に向島よりして、深川遊女
町百風呂にあそびつかけ、龜井戸天神様へかけ

廻り、後に兩國筋萬と云ふ料理家に、四日の夜
酒わんを催し、只いつこふに寐る事あたはず。大
丈夫の師匠に附添まはる弟子實太夫も、大根者と
近付人はをいふ。
又日をおきて石町新道紅鱗亭行、兩國、深川辨天
遊所、内神田唐人料理王子参り、坪の内参りにい
たるまで、わづかの月日におちもなく、師匠染太
夫も弟子もはや江戸子一粒より、芝居は先達て二
代鑑大入をして、日數五十四日うちつきき、それ
よりをはる藝だいは、又も附物吃の又平、并に忠
臣藏にては九冊目に寺岡平衛門双蝶々引窓、秋の
頃にいたりて、日蓮記染師の勤作住家、ここのは
か大當り、年も明れば初春に、薄雪の中のみき、
出世太功記、後が、甃には九十九館に、玉椿妹脊
山、向床が(彌太郎事)若太夫、本床師匠、加役
に萬歳酒呑童子、綱の館、是までの所、長らく相
つとめ、肥前座をいどまを取つて、文政十二年、

巳丑年の二の替り堺町の土佐座芝居へ出勤となり、初げだいは、伊賀越沼津、替り藝だいは梅川飛脚屋、それよりして、糺町平川天神社内芝居に於て妹脊山大判事、切に二代鑑、是より芝神明社内芝居にて、二十四孝三だん目、替り藝だいは忠臣蔵九冊目それから品川高輪如來寺芝居へかはり、千本櫻、此時弟子實太夫追々はつたつして、序切に三段目の中、きみ實太夫が役場なり。

それよりしだいに年もへて、天保三壬辰二のかはり又堺町土佐座戻り、藝だいは八陣の段八冊目本城の段、實太夫役は序切に八冊目の中、かはりて二十四孝の段三段目、實太夫役は化物屋しき、それより木挽町芝居へうつり、伊達くらべ、實太夫の段ははにふ村の中、師染太夫は附物吃の又平是より奥を書ならべては限りあらねば略せり。それより當地寄場座しき淨るりにさしかる。先づ始めに芝神明前金板席、それより糺町萬長其外

合、あるひは衣服の、ぬひ仕事、仕立屋への取渡し、ふんごしのせんだくやら、ある時には御座敷にだされて、出行れる時、荷物の造らへよりして其供に連られたるが、あまり多用の中無人ゆへ、何人にも居候者がほしと思ふ處へ、折々大阪より師の弟子やら、又はこんせつの下廻りの太夫師を尋ね來りて居候者をする者、居合す事あれども、しんぼうを仕かねて、立去る。實太夫は今も多用たりとも、苦勞にならず、心勇て心一ぱい身をはたらかせ、夜々酒宴を仕舞て、師匠もね入らるれば、それより我手帳日記を書しるしたり。師のそばを放れず出るにも入るにも、附添居ればあたり近所の人々、此師弟が、門をあゆむを見る度々ソレ／＼辨慶々々共云、又は片假名のトの字共と云をりたり。其のわけは、師は着丈四尺二三寸、弟子は着丈三尺四五寸にて、雪隠へ行かるゝ迄、はなれぬゆゑ、トとかくの如く諸人は是を云ひ

年々出勤に廻りし家数は、あきらかに覚えあれども、是こそま事にくどくしきゆゑ、是を略して戀と無常に取かゝるは、師匠はこれまで石町の泊り家に旅宿してゐられたる所、御ヒイキ伊勢屋忠右衛門様と云ふ大家ありしが、大旦那此隠居所にゐられしに、今はまた、木場の別荘にうつられ、此隠居所には、留守居ををらず、家は切ありて師染太夫大ひにヒイキになり、此家（田所町伊勢忠の家）を預り引うつりたるが、中々大きな家にして、間敷も有り、坪の内ひろく、草木しげりけつこふと云ふ家は是なり。扱てこまるのは、弟子實太夫なり。大きな家に、朝夕あけたてする兩戸の數二十四枚あり。是にならひてこの外に多用の中に、此家より師弟芝居出勤する事ゆゑ、日毎のはきそうじもをこたらず、飯たきが始めに、毎夜酒宴のこしらへ、三助がはりの使はんはもとより、師染太夫の芝居へ往還る、咄し、談事

をりたるなり。それはさておき、御座しきの先々略して、軒數斗をいふ時は、まづ始りが、神田荒木金次郎様當旦那は御綿御用人にて師染太夫をまねいて、常々淨瑠璃のけいこをいたされ、金閣寺并に太平記玉椿など語られ、師を大ひに御ヒイキ下されて、折々大金を、めぐみにあづかる也。扱てそれよりは、鐵砲洲濱中様さしき、新吉原玉屋同所扇屋平泉屋、田所町西村松前様御殿京橋木村木挽町天満屋八丁堀島旦那、水戸御前、一ツ橋御前、品川、若松、四谷組屋敷小谷作内様各々御座しき、一度にあらず。なほ又、遊所の方々に別して毎年冬にいたりて戎講度々によばれゆく事なり鹽瀬様などは度々の其のうちも神明明神様御祭禮につき、御座しきありし時、上廻りの太夫、三味引残らず打寄られ銘々藝共は、本式はならず、銘々一藝しやれた事はかりにて、酒宴が、第一なり此時當地に西村幸助と云ふ淨瑠璃の素人太夫あり

しが、日高川を語りけるが、三味線は一丁にてはこたへぬと申ゆに三味引語助、市太良、勝造、吉右衛門、勝助、右五人一時かたまりて、西村幸助に日高川をかたらせ、三味を引たて、三味を引をはりに五人の三味線五丁一時に、ばちにて三味線のかわをやぶつて、五人の三味引が云ふやう、西村幸助さんの聲には叶はぬとて、あきれた顔をすれば西幸さんは、いよ／＼頭に乗りにて、此時より猶金太郎高うなりしとき、爰にまた、師染太夫上方にても御ヒイキの旦那たちあれこれ有りし其中に、大阪近郡灘の作酒屋の松倉様と云人あり。此旦那先々四代目石屋橋染太夫をも御ヒイキにて折々つゞきて當五代目染太夫まであつく御ヒイキをいたされし御人なり。

されば此度當あづまの新川酒問屋に仕切寄にお下りになり、旅宿は右の新川の播磨屋と云ふ酒問屋にて、染太夫に面談いたされしこと度々にて師染

太夫の芝居を見物に入られ、吹屋町中菊と云茶屋へ染太夫并に野澤語助もろどもにおまねきにあづかり、大いにちそうになりたるが、此旦那淨瑠璃はよくかたられ、師染太夫の三味線にて語られたり。此座しきの先々をあらましいへば、先始りのざしき、新川千代倉并にかやば町新堀中尾屋にて竹本志賀太夫のさらへ會、右何れも語り物吃の又平なり、此時當地芝居出勤の(富太夫事)吉野太夫後に住太夫と改名をせし太夫、此度び大阪へ歸るに付、御當地名残りの會白銀町井關にてもよほしあるにつけ、かはり吃の又平を語りに行く。それよりかやば町鴻池太郎鳴戸太夫のさらへ會にては長柄をやはり染太夫の三味線にて語る。此間大分の日數なりければ、早出立とありて、樂家、新屋熊野屋にて出立ふれまいをいたされ、明る日は彌々出立なりければ、師匠は旦那を見立、品川高輪の料理屋にて酒宴して別れる。此時師弟共過分

の禮物を納受して立歸る。扱てまた、前文にあらはれし大阪出立の時、師の染太夫が實子を離別したるおつるに預け置きてより別れし實子松之助の事ばかりを案じくらせるが、此子病氣をせしとの報知の書面到來せしかば、師匠は、これを見るより大いにちからをおとされ、人眼に見せぬ落涙はそばに見る眼もいとほしく、扱てそれはおいて爰に又本町のほとり何やらといふ女あり媚かたちは美しく艶き女なりしが、ふと有とて師匠に心をかけしにや、酒をも呑かといへるが、師匠は其後此女の身上世人に聞きければ、此女は師匠が當時預り居る住居をする座敷の本主伊勢屋忠右衛門様のかこひ女とさしより、さすがの師匠もおどろきて、今さらこうかい先きに立すどて、其身をたしなみ居たりける。まことに惡事千里とて、いつの程にか旦那の耳に入りしにや、或る日、伊勢屋より至急に人をもつて、他の事はいはずして、

家明けを申渡されて、師匠は只口あんぐりとして何分伊勢屋より他の事をいはねば、利口らしき返答もならず、いさいかしこまりしと答へして、直様家の取り方附を、實太夫に打まかせ、其身は爰を退ぞかれ、後の始末は實太夫心配すれ共、旅の空餘分の荷物もあらざれば、一時の間、住なれし彼の家を明渡し、一兩日はさまよひしが、此間名残りの會をもよほしたる吉野太夫上方へのぼる用事もすみて、上阪のこしらへ共今迄の住居とせし賣家を買ふ人とはしくして、出立延引の時を聞くや、これ幸ひと早速に談合きまりたれば、取引も相済み、直ちに家のそうじもして、文政十年亥八月二十五日本石町四丁目新道の家に引うつりたり。

(未完)

近松と俳諧

齋藤 溪舟

歌舞伎浄瑠璃にあらはれた近松門左衛門は、松尾桃青とともに元祿文學の双壁であれば、其傳記にせよ、其浄瑠璃にせよ、今や盛んに研究せられつゝあるが、予は茲に彼れと俳諧について、少しく思ひついた事を書いて見ようと思ふ。

近松が俳諧を好んだか、好まぬまでも之を作つた事があるか否やといふ事は未定の問題である。茲にいふ俳諧といふのは俳諧連句、俳句を引つくるめて云ふのであるが、彼れの名によつて今に傳ふる俳諧といふものは實に寥々たるもので指を屈して數ふるほどよりない。既に彼れの俳諧を論ずるのに彼れの俳諧としての材料が斯くの如くに乏しいとして見ると、彼れと俳諧の關係などは論つら

徒からは至極入り易い道であつて、決して浄瑠璃や浮世草紙を書くやうに憶劫で困難な事はない。元祿前後は實に此の俳諧の盛んな時代であつて、季吟にしろ、宗因の檀林にしろ、桃青の蕉風にしろ、兎に角此の道の廣く行はれた事は云ふまでもなく、式士も、町人も、大名も、百姓も、如何なる階級に在る者でも、大抵俳諧に指を染めぬものはなかつた。況んや文才のある者で之を學ばぬ者は殆んどないほどあれば、近松とても多少此の道に携はつた事があるであらうとは、容易に想像し得られる所である。又況んや乏しいながらも彼れに一二の俳諧があつたのを見ると、其心がけがあつたといふ事だけは證據立てられる。併し近松に於ける俳諧は無論餘技であつて、ほんのお茶を濁して見たに過ぎない。西鶴が檀林によつて睥睨したなごは、とても比べものにならぬ。季吟門から出た山岡元隣の著した「寶藏」の附録

四〇

ふほどの事はないと云ふ事になるが、併し其極めて乏しい材料によつて其方面から何事かを考へて見るといふ事も全く興味の無い事ではない。元祿文學は近松の浄瑠璃と桃青の俳諧の外に西鶴の浮世草紙がある。近松と桃青を以て元祿文學の双壁と稱する事を得ると同時に、更に之に西鶴を加へて三幅對、又は三足鼎立の文學と稱する事が出来る。近松は人情の上から浄瑠璃を築き立て、桃青は造化自然の上に俳諧を求めた。而して西鶴は社會人事の上に觀察眼を注いだ譯であるが、此の西鶴は俳諧では檀林の勇將である。以上近松とて俳諧に指を染め得なかつたとは云はれぬ。松尾桃青をして浄瑠璃を作れ、浮世草紙を書けと云ふのは無理な注文かも知れぬが、近松をして俳諧をつくれといふのはさして彼れに不可能な注文であらうとは思はれぬ。巧者であるか否やは別問題として、連句、俳句の如きは、少しく文才のある

に載せてある近松一家の人々の句中信盛(近松)の句に、

しら雲やはななき山の耻かしく

といふのがある。此の句は彼れが十九歳の時の作で、正しく寛文十一年の事である。されば彼れは浄瑠璃を作らぬ以前に此の俳諧の道に指を染めて居た事が分る。而も近松は俳諧に於て、季吟門であると云ふのと、元隣門であるとの二説あるやうだが、詰りいづれにして其俳諧の流派から云へば季吟門である。即ち元隣は季吟門の高足なのだ。今近松の俳諧を詮索するには先づ彼れは季吟の直門か、又は元隣の門弟かといふ事を判斷せねばならぬ。

「寶藏」に彼れの句の收められた寛文十一年の翌年即ち同十二年は季吟が幕府から召致せられて、江戸に赴いた年であつて、而も此の頃は、宗因の檀林派天下の俳諧を席捲し、季吟門の俳諧、即ち貞

徳流の俳諧は漸く下火となつた時である。木間宅齋の「東舎話」に載する所を見ると、

我友山岡元隣醫術に精しく、亦俳諧の宗匠たり。季吟ぬしと名を齊うして、多くの門人を持ち、紳縉のどもがらもくびすを接してゐたる云々である、唯此の書寛文中の版行と思はれるが、而も確たる年號を記してないので、甚だ茫漠たるものであるが、其末尾に至つて斯う書いてゐる。

歌ぶき正三郎俳諧の執心にて善くすとぞ。これより優人女子ども、これにかたぶき學ぶもの多し。

「歌舞伎正三郎」といふのは當時の俳優の事であらうが、「優人云々」から考へて見て、近松なども或は何うかした縁故から此門に出入して俳諧を學んだのではあるまいかと思はれる。

ところが茲にまた近松は季吟の門にも出入をした

のではあるまいかと思はれる一事は彼れの句に、おもひ捨て寐る氣か猫の空詠

といふのがある。これは彼れが元祿中の作と思はれるが、此の句の下五文字、即ち「空詠」といふ詞は如何にも奇態な云ひやうである。甚だしく澁難險晦な文字とも云ひ得べし、また一方から何處か一と癖ありさうな文字といふ事も出来る。兎に角斯んな奇態な文句は、或る特別の場合に或人が獨創して作らねば出来ぬもので、なか／＼暗合などいふ事は容易にあり得べき筈でないのに、蕉門の根本其角の句に、

松の蟬寐かはる猫の空詠

といふのがある。正しく是れ「猫の空詠」といふ文句の暗合であるが、併し猫に空詠といふ事が特にあるものとすれば格別、猫が空を詠めたところを「猫の空詠」と云つたのならば、双方の暗合は實に不思議といふより外はない。暗合といふ事は、詩

歌俳諧に於て少なからぬもので

あるけれども、而も斯う云ふ暗合は先づ絶無と云いてもよいの

だ。然らばこれは近松が其角の句をもじつたか、其角が近松の

句をもじつたか否やといふにつ

いて考へて見る必要がある。

根本其角が京都に上つて季吟の宅に暫く寄寓したのは、元祿元

年七月の事である、其角門の堤

亭の堤亭覺書に記したに依る

と、師京にのぼりて、季吟大人を訪しとき、流行の句を論じて近頃得つるものを一々に示合ひ、兩師をり／＼に夜をかたりあかしとて、是師の物語



なり、

とある。されば其角は季吟に多くの句などを示した中に此の「松の蟬」の句があつて、何かこれについて兩人の間に議論があるつたのを季吟の門に出入して居た近松が何かの折に之を知つて

たのではあるまいか。是より先其角は例の檀林派に最初の大打撃を與へた「虚栗」の著あり。續いて貞享の末年に「續虚栗」を出して、稍々俳諧の優物になりかけて居た頃であるから、とても近松などの句から文句を假りて來て自家の句の中へ、其まゝ用ゐるやうな事はあるまいと思は

れる。

大名の一粒種やほとゝぎす

これも近松の句として梨風(姓奥村、丈右衛門、京都の人)の「浮世ぐるま」と云ふ隨筆に記してある。此の書によれば、近松は季吟門としてあつて、而も俳諧の事は一切記さずに、唯浄瑠璃作者としての彼れを荒ましに叙した末に、此の「大名の」の句が添へてあるばかりであるが、これは近松が作の「丹波興作」の書き出しに、

大名に生るゝ種の一粒が何萬石ぞ幾萬人

とあるのから來たのであらうと思はるゝ、若し此の推定にして違はぬと、此の句は無論「丹波興作」の作が成つた當時、少なくとも一年も二年も後に出來た句ではなくて、其當座に作つたものと云ふのが穩當であらう。されば「丹波興作」の浄瑠璃は寛永六年に成つたものであるから、此の句も亦寛永六年中の作と思はるゝのである。

ぬのである。

して見ると之が或は近松の句であるかも知れぬといふ疑ひも出てくる道理だ。今貞徳門に於ける人々の句で「げにや」云つたのを例に引いて見ると二三ある。

げにや／＼下々の下人も花の春 徳元

げにや／＼玉と見て御代は稻の露 道甘

げにや／＼月に來て見る玉津島 宗利

げにやげに華胥とは花の蝶のゆめ 季吟門 松泉

「げにや／＼」が貞徳門の特有物ではないが、これも此の門の調を知る一つの葉であらうと思はれる。

「俳諧よもの草」といふのがある。星反といふ僧侶の作で、後學蘭島(出づつは)の、彼の蝶夢法師の序がある。これに上は宗鑑、守武から下は元祿延享あたりまでの俳人の句が載つてある中に、信盛の句が二つある。併し信盛とは果して近松其人

「本朝百人傳」といふ本がある。頗る杜撰らしいもので、文化二年の版、百人の肖像を描いた上に、大きく歌又は俳句を書きつけて、更に上欄に細かい字で、ざつと其傳記をえらしたもので、而も其歌や、俳句必ずしも當人の詠んだものとも限らぬやうな風で、中に近松門左衛門信盛といふのがある。五十ばかりの年輩で素袍を着け小刀を手挟んだ半身像である。上に、

げにやげにやこの酒うまし山櫻

といふ句がゑるしてある。けれども果して此の句は本人の作であるか否やは最も疑はしい點であるが、併し此の句振から見ると頗る古調を帶んで居て、決して文化、文政あたりの俗臭紛々たる句ではない。句の善惡は別として、文化、文政にこんな句は斷じてなく、亦爾うかと云ひて元祿あたりの蕉風の句でもない、何うしても元祿以前に於ける貞徳、貞室流の句であつて、檀林風とも受取れ

であるか何うか分らぬ。

春霞たつみの方に二荒山

初拾わすれぬ人に忘草

此の二句である。「春霞たつみ」と引つかけたのは全然貞徳あたりの古調であつて、而も季吟にいたつても、此の風調が残つて居た。而も「忘草」にいたつては近松の句に尙ほこんなものがある。

傾城はみじか夜ながら忘草

これは福山の人北村雅年氏の所藏にかゝる短冊の句で、これには信盛の二字明かにあつて、確に近松の自筆なさうであるが、此の忘草が近松の作ならば前者の忘草もまた、彼れの作でないとは限らぬ。

何分見聞の挟い予の事であるから、近松の句としては多くを知らぬのみならず、此の稿を草するにあたつて、委しく諸書を涉獵する事が出來なかつたので益々材料不足を感じたから、此の他には多

近松は日本の太史公

木崎 好尙

く云ふ事の出来ないのを遺憾とする。
 扱て以上記した近松の句に就て見ると其音調はいづれも穏やかであつて、檀林風の覇氣の見えないのは、つまり彼れは季吟、元隣等の門に俳諧を學んだからである。又而も蕉風の枯淡洒脱を得て居る風もないのは、其然るべき所であつて、情と想とを以て生命として居る淨瑠璃の作者としては冷靜閑寂、水の如き蕉風の俳諧とは其思想が相容れなかつたのは無理からぬ次第である。
 要するに近松の俳諧は彼れの餘技であつて、彼れが慰み半分に之に遊んだのであらうから、彼れの俳諧が多く今に傳はらぬのは、さもあるべき事だ。茲には唯近松も、俳諧はやつた事があるといふ丈けの事が判ればそれでよい。

有りのまゝなる蟻のさゝやきも聞き通しはなく、三山にしてこの疾あつたればこそ、蓄音機にも譬へつべき耳の快感をほしきまゝにすることを得つるなれ、耳の遠かりし賜ものも亦大なる哉。
 夜は深けたり、文話はいよく佳境に入り來りぬ。節齋筆に墨汁ふくませつ、「藤澤東暎の評に、日本の大文章家は徂徠を外にして中井竹山と頼山陽のみと言ひしが如何にと、筆をおくと、三山その次に「僕は竹山よりも履軒が好きでござる、さは服部南郭も恐らくは二人の後へに在らじ、節」これは異なる事を承はる、僕は南郭の詩文一篇として感心いたさぬ 三、さらば僕の見違ひかも知れぬ、伊藤東涯の文その佳なるものに至りては亦未だ必ずしも遽かに竹山の下に在らじ 節 文章を以て論すれば徂徠の外、寛政以前諸儒の文は一抔して可なり 三、まことに左もあらん、敢て問ふ寛政以後は徂徠に比肩し得る人がござるか 節 徂徠は別看

近松の名文をたゞへて、日本の太史公(司馬遷)と許し、は、近世の名文家森田節齋先生なり。萩生徂徠が近松を稱揚せりとば、人のよくいふ話なれど、節齋の斯くも近松を崇拜せりとば、引く聞ね渡らぬふしなるべし。
 節齋、或る年故郷大和の五條に歸りしをり、その畏友として兄事せる同國八木の碩學谷三山翁を訪ねて久闊を叙せしに、三山は絶て久しき節齋の快話を聴かんと、數日間はおのが家居に引きこめつ、學問上の議論をも闘はし、世間話に興じもしたるが、三山は耳なし山の耳が遠く、對話がはりに筆談に物したる仕合せには、吾等後輩の耳にまで、兩先生の話し振りは素より、親しく聲咳に接して世間憚らぬ内所話しさへ手に取るやうに

板として姑くこれをお置く、尤も寛政以前に稍古文の法門を開きは室鳩巢と三宅觀瀾の二人、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里は學問の力量こそ薄けれ、文章は漢土の名家に似たり、竹山、履軒は力量すぐれたれど、文章は少し落ちる、その外赤松滄洲、僧大典の文は法度正しく佐藤一齋、頼山陽、柴野碧海に到りては文法大に具はるに似たり 三 高論まことに權衡にかけたる如し、感服々々と前口上よろしくあつて、さて節齋は坐住居を正し、以上の諸家を足元にふみにじるばかり、一さは聲を張り上げて、否、墨くろく、筆太々と「僕は常に近松門左衛門を以て日本の太史公と爲せり誰の彼のと論する世話は入らぬ、この論餘りに奇抜に過ぎて、きく人皆驚き怪しむ」と喝破しける程に、さすがの三山何の挨拶の仕やうもなく「節齋は更に轡を近松氏に執らんと欲するか」……これにて徹夜の筆談は終りかゝりて、夜明けの鶏

が啼きしとなり。

節齋は、太史公一點張りの評判高く文章家仲間
聞に渡りし人なれば、三山は、節齋更に日本では
近松氏を昇ぎ上ぐるのかとおおげしなり。太史
公の史記と、近松氏の浄瑠璃とを和漢古今文壇一
對の偉觀として、この外には眞の大文章を認めぬ
といひしは、無論突飛なる肝癢まぐれの評には相
違なけれど、徂徠以來山陽あたり迄の評判に氣が
くむくした揚句の果てが、高く近松門左衛門を
掲げ來りて、筆談に徹夜したる眠氣ざましの快話
と見れば、この大づかみの評論、なか／＼に味ひ
ありと謂ふべし。

近松の研究舞臺として、近松會の通信機關として
本誌の發行あるがうれしさに、何でもかでも近松
を日本の太史公〓今やうに褒め立つれば日本の
沙翁〓とおし崇め奉りて、いやが上にも吾が佛
を尊くしたらと、節齋先生の禪にて和漢の兩雄に

角力を取らせて見るこ此くの如し。

附言、この筆談の原本は、當地の老國手松堂
山田連先生の秘笈を借り來り、拙著『森田節
齋』の稿中より抜き書したるなり。

大家の見たる近松

加藤 紫芳

▲徂徠近松の『曾根崎心中』に「此世の名ごりよも
名ごり、死に行く身を譬ふれば、あだしの原の道
の霜、一足つゝに消れてゆく、夢の夢こそあはれ
なれ、アレ數へてか曉の、七つの時が六つ鳴りて
残の一つが今生の、鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂
と響くなり」とあるを見て、近松の妙處此うちに
あり、外は之にて推すべし。

▲蜀山人の『奴だこ』に「ほ／＼き程な血の涙、お
ちて松露になりやしよまい」と云へる童謡は、近

松の『霄庚申』に「ほ／＼き程な血の涙、はら／＼
こぼせば走り寄り、わしも病者おと、様を、さき
へおくるがじゆんよいを、かへつてうきめを見せ
まする、是も何ゆに、相生の、松茸ゆゑと抱きつ
き、木末にしらぬ松の露、おちてしよろになり
やせん」と云へる文句を中略したるなるべし。

▲其の翁草に『南水漫遊』を引き、近松の文勢に
は人を寒からしむる言葉多し『最明寺殿百人上臈』
の道行に「蝶の翼のおしろいを、草にこぼして梢
には、鶴の霜毛をぬぎかくる、雪は花より花多き」
とあるは石曼卿の詠雪の詩に「蝶は粉翼を遺し、
輕うして拾ひ難し、鶴は霜毛を墜し、散て轉せず」
とあるを和語に移せしものと、やんごとなき御方
の御感ありき。

▲橋庵漫筆に、或時竹田出雲、穂積以貫等門左衛
門方を訪れたるに、淀屋辰五郎（おこた）草には
茨木屋幸齋とあり）の事跡を書きたる浄瑠璃の中

に驕奢のさまを云はんとて、金の冠り着ぬばかり
と書きたるを、町人には似合しからぬやうに思ひ
たるに、翌日其續稿を見れば「金の冠着ぬばかり」
とある次へ「しやくは持病にありとかや」と續けた
るを見て各々愷然たりしかや。

▲馬琴の『著作堂一夕話』に余浪花に遊びしとき歌
舞伎狂言作者並木正三を訪ひて、其筆記する處の
戯材録を一覽して、近松が事跡を知れり（中略）近
松が遺す處の硯あり、後、近松半二に傳ふ、其硯
の蓋に漆して、事を凡近に取て、義を勸懲に發す
と記す之は笠翁傳奇『玉搔頭』の序に、昔人の傳奇
を作るや、事を凡近に取て云々の語を取れり、近
松の小説に心を寄せし事之にて知らる、此人は實
に本朝の李笠翁なり。

▲來山の『女人形記』に「物いはす、笑はぬ代りに
は腹立す、愀氣せず」とあるは、近松の「遊女の
畫賛」を取りしものならん。

樂天が意中の美人は夢のむつこと、僧正遍昭の詠中の戀は繪にかける女、とり方にはそれは是か、什塵生
物云はず笑はぬ代り悵氣なく衣裳表具に物好みせず。

平安堂近松七十一歳狂讚
附言、馬琴が金屋橋熊野屋某の家に近松が墨跡二幅あり一は美人の畫賛とあるは是か。

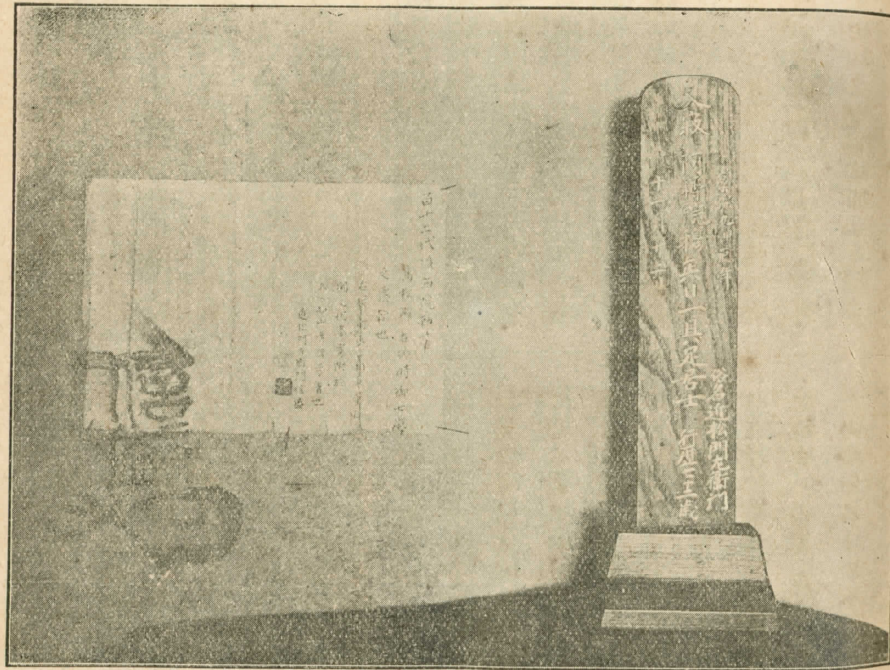
巢林子の遺物について

東京 水谷 不倒

近松會雜誌に何か書けといふ急命が下つた。近松の事ならお手のもので、いくらでも書く事はありそうに見えても、既に書くべき事は大概御用に立ち、此の頃では間屋も殆ど種切れといふ有様。併し近松會員諸君にお目にかゝる雜誌と聞いて、そ

こに又野心も出で、少しばかり予の希望を述べて諸君の賛成を得たいと思ふ。それは外の事でもない、近松の傳が今に一向明白にならぬについて、予は諸君のうちに、若し何か参考となるべき事實を握つてゐるゝ人があるなら、包まず藏さず、此の雜誌を機關として公表せられん事を望むのである。例へば近松の作の草稿とか、又は其の筆跡とかいふものは、是迄世に知られてゐるものゝ外に、まだいくらか無くてはならぬと信じてゐる。勿論貴重なものなれば、門外不出、他人には決して見せぬといふ物もあらう、それを強ひて見せて貰ふにも、及ばぬが、えかしさういふ貴重な近松の遺物を持つてゐるゝ人があるならば、書簡なれば其の全文章、もし出來得る事なれば、寫眞に取つて其の傍だけでも示さるゝ事が出來たなら、近松研究上の光明である。彼の「睡餘小録」に載せてある巢林子が衣冠束帶の畫像に「代々甲冑の家」

の讀は、今は誰が所持してゐるか否として聞く所がない。同書には建仁寺松原氏の藏とありて、其の頃までは現存した事が明白であるから、今でも何れかになくてはならぬのであるけれども、少しも近松を知らぬ人の目にはこんな物は何が何やら徒らに塵芥の中に埋れてあるかとも思はれるされば之を所持してゐる人は勿論、其の所持者を知つてゐる人でも宜しい、どうか此の雜



(牌位翁松近寺濟廣知々久州攝)

誌に投書してわれゝの久しい疑問を解かれない。又近松の筆跡の中には、今の所平瀬氏の「葛粉の消息」と松山氏の「妹脊海苔の消息」とに打止めて、是れ以上のものは未だ発見せられないが、果して近松の筆跡はこれに盡きてゐるか、更に天下の耳目を驚かすやうな眞跡は出て來ないのであらうか、予は切に諸君の探究によりて、新しき發見のあらんことを希望する。

瑠璃の屑

小野 棣華

○大阪に於て、始めて素人淨瑠璃を公然と行ふたのは、寶永四年の春であつて、攝陽落穂集にも、大阪生玉社内にて、稽古淨瑠璃御免あり、これ嚆矢なりと書いてある。

○近松三妙作として、國性爺合戦と、雪女五枚羽子板と、曾我會稽山とを數へて居るのは、越中富山の竹本久尾太夫が、大阪因講惣長彌太夫の勧めに因りて、豊竹島太夫と改名して、竹本七五三太夫一座に加はつた時の摺物である。三妙作とは妙である。なぜ三名作とはいはないのか。元來近松研究上の製語でないとしても、頗る妙な感じがする。

○瑞垣能久爲蘇神、といへば如何なる神様か、知る人は少ない。不移山人といつても、如何なる隠士

人亡び、實はもとへ返り、家國治り、千秋樂をつげるのが樂であるといつてを。ちよつとおもしろい。

○又、漢詩にも比較してを。それは、詩の起、承、轉、合にあてゝ見ると、大序は起である。二ツ目は承である。三幕目より一變して、世話場は轉であつて、大切は合である。これも、元祿、寶永、正徳、享保の頃の脚色は、法則も定まつてをらず、昔物語の假名木を讀むやうで、元文、寛保、延享頃から、追々ひらけ来て、寶曆、明和に至つて、法則備り、益々巧になつたのである。右の四情は不易であつて、人氣の好に投ずる、全く文花であるといつてを。一部の趣向、狂言を仕組といつて、詞言は流行で、全く花である。四情の實に、流行の花を得て、始めて妙作、否名作と云ふのである。然るに花實相得たる狂言は甚だ稀である。

五二

か知る人は稀であるが、平安堂巢林子といへば、すぐ近松門左衛門其人たることを知るのである。明治九年二月竹本春太夫、同實太夫、鶴澤清七等の發起にて、生國魂神社境内に、淨瑠璃八功神を祭祀せん爲め、官許を得て齋きたてた、其中の一人なる近松翁の神號を、如上の通りにつけたのである。

○歌舞伎狂言盡しを、四番つゞきと定めたわけは、西澤一鳳の説に、喜、怒、哀、樂の四情にもこついたものらしい。口明は、大抵若殿の遊興、花見、茶屋場であつて、是は喜である。中入は、謀反人家を傾け、忠義の家老切腹するのは怒である。次に、小幕となづけて、次の幕の仕込に、道外のちやりごと、または若殿と傾城、姫君などの道行を見せ、引返して世話場は、大事のいとし子を身がはりに殺し、寶物の質うけに、女房を廊へ賣る悲を見せる、これが哀である。大切にて悪

○淨瑠璃を五段に綴ることは、能樂の番組と同じことで、初段は脇能、二は修羅、三は葛事、四は脇所作、五は祝言である。最も重んずるは大序であつて、大序は一座の立物たる太夫の勤むべき第一の大役である。まづその日の祝儀といひ、且は諸見物への一禮の爲めであるから、則ち一部の始ゆに、末々の輕き太夫らには、任すべきものではないと云ふ定めであつたが、中古以來は、全く反對になつて、大序といへば、輕き太夫に語らせて置く風になつて、所謂大序連といふものが出来た。是は見物も未だ來揃はず、大切の役も出ぬと云ふやうな理由からでもあらうが、是は見物の入りが遅くなる原因となつたかも知れぬ。生存競争のはげしい當今では、まづ良い所だけを聞かう、見ようといふ向もあらう。實際時間を尊重することは、今より一層甚だしくならうから、止むを得ぬ事である。

○國性爺合戦と、北條時頼記との興行競争をやつたことがあつたさうな。前者はいふまでもなく、近松翁の名作で、後者は西澤一鳳の傑作である。竹本座で國性爺を遣ると、非常な大評判で西澤の時頼記を豊竹座で遣ると、大當りで、二ヶ年間も打續けたといふことである。かくの如く、近松翁の國性爺、反魂香、西澤が時頼記、萬石通は東西の當り狂言として、一世に轟しく、後進作者の模範となり、歌舞伎、浄曲界の改善の標準となつたのである。

○昔もすでに、浄瑠璃大にすたりて、歌舞伎新作日々流行すと、傳奇作書にかいてをる。余輩は明治の今日にも、二者を比較して、同様の感をおこすのである。

○或者が近松半二を訪ふて、浄瑠璃作者となるには、どうすればよいかと尋ねた、すると半二の答へるに、堂上の事を知らば有職者である。弓箭軍

學を知らば軍學兵法家である。佛教を知らば大和尚である。聖經記典を知らば儒者である。菅公の事も、楠公の事も、丸吞に知つたやうに書いて、聞く程の事を奥深げにつばなかし、和歌管絃詩俳香茶花道、萬能の伎、何一つ正しく覺れたでなく、聞取法聞耳學問、根氣をつめて學ぶことのできぬ自墮落者が、作者となれるのである、と云つたさうであるが、此の間の消息は、餘程六つかしい。所謂半二らしい言葉ではないか。(未完)

烏帽子親祖父の

かたきも討てさいふ (川柳子)

近松の新釋につきて

坪内逍遙氏談

近松會雜誌に何か書けといふことか、それならば僕も幾分か關係のある「近松傑作全集」の新釋について一言しやう。あゝいふ物は夙に出来てゐなければならのであつたに、今日まで無かつたのは兎角古きを向んで近きを卑む文學的階級主義の然らしめたのであつて、我學界の一大闕點であつたといはねばならん、近松の價値は今更いふをまたない、公平に評して紫式部以上、馬琴以上で、取りも直さず日本の沙翁である、然るに今尙其信賴すべき全集が無く、其註釋類に至つては完備したものとは、唯の一種も無いとは奇怪な事である、かの元祿文學復興以來西鶴近松の翻刻が頻に行はれ、就中近松の作を集めたものは幾種となく刊行されたが、校訂が粗漏であつたり印刷製本が龜末であつたりして何れも信用する事が出来ぬ、註釋の附いたのでは稍々篇數を多く集めたは饗庭篁村氏の「巢林子選註」だが惜い事に其註が簡である、同氏にあらざればと思ふ發明の説のあるのが同書の特色だが、少々黒人向の氣味で、粗に過ぎたので初心の讀者には向かぬ、それから佐々、藤井、高野の三氏が各別々に出版された世話物の一二部の細註があるが、それは如何にも深切な良著だが、何しろほんの一二冊だから廣く近松の手引とするには足らん、其外「浄瑠璃通解」といふ本も出たが是れは最も重きを置くべき筈の近松物をば却つて

度外視した趣のもの、それこれ今日に至る迄近松の註釋書の整備したものとては全く只の一つも無いと謂つて可い。

按ふに近松物を註釋するは何事も便宜が多くなつた我今日の文學壇に於ても尙且最も困難な仕事の一であらう、他の註釋ならば古今の參考書類を容易に手に入れる事が出来る今日だから舊幕時代の學者等の思ひも及ばない便宜がある、昔は十襲珍藏の門外不出の奇書も今は陸續翻刻せられて世に出る、さなくも圖書館に備へ付けられ若しくは借出す事が出来る、で註釋といふ範圍内では、新しい頭さへあれば、僅々五六年間にして契沖や季吟やの壘を摩して其以外に出づることも容易い、然るに特り近松に至つては過去に何等の枝折も無い、「難波土産」式の物が高が一二種あるのみであらう、而して其文章はといへば、あの通り神祇釋教戀無常、和漢雅俗の飛んでもない方面まで亘つてゐるので眞に八宗兼學の博識でなければ手が着けられぬ、俗といつても普通の俗ではない、俚歌、童謠、流行歌は勿論狹斜語から方言から卑賤語から博徒や盜賊やの通語までも心得てゐねばならぬ、それから其註釋の仕方があまり専門家向きになつて澁くてもいけず、あまり詮索過ぎて煩瑣でもゆかぬ、一寸例を擧げていへば、先づは大和田氏の「謠曲通觸」程度が可い、然しあれは何かど土臺になる舊本があつたので材料の整理も容易かつたであらうが、これは礎から始めねばならぬゆゑ骨が折れる、「謠曲通解」の出來た當時批評家の一部には餘り甘過る、分り切つてゐる語句にまでも註釋を加へたとて嘲つた人もあつたが、現代の需要に副ふた

めには成るべく註釋の詳細な方が可い、本來近松のやうな音樂的な文章は如何にも流麗に出來てゐるの大概の者が中頃で酔つてしまひ、半分夢心地になつて我れ知らずすらすらと讀流してしまふが其實は解つてゐるやうで解らぬ句が多い、殊に時世が變り風俗が改まり用語や文章の一變した今日に於ては了解し難い言葉使ひが愈々多くなつて、今では一かど名を知られて小説家文章家といはれてゐる若い人でも西鶴や近松を讀まして見ると或部分はカラ解しねない、いや僕等でも唐突に一字一句の語原や正確な意義を問はれると答へかねるのが多い、先頃中學用の國文教科書を拵へたが其中へ西鶴や近松の教課用として差支へない限りの名文を取入れて見たが、さて教師用の參考書を編輯するに及んで其一字一句の説明や解釋には存外な骨を折つた、これに因て考へると明治も二十年以後に生れた人たちに取つては近松や西鶴は外國文を讀むよりも難かしいに相違ない、外國文に對しては字引や註釋書の重寶なのが幾らもあるが近松や西鶴に對してはそんな手引が一つも無い、どころが此の一つも無いといふ近松の爲めに最初の細密な註釋書を作つたのだから水谷君の骨折は思ひやられる、其代り若し此の註釋に次ぐに西鶴乃至八文字屋、江島屋の傑作全集といったやうなもの、註釋を以てし而してそれに索引を附したなら立派に元祿文學の字書が出来ようといふものである、明治以來種々の良い字彙が出来たがそれらには概して雅文學の字書で、廣義に謂ふ國文學の字書とするに足らぬ、足らぬ筈である、我國民文學の精英であつて最も我々明治の人間に近くもあり其趣味から言つても最も廣く複雑で、他の平安室町の文學のやう

に貴族的に偏せず、平民的である元祿享保以降の最大文學を度外視した字書であることである、もとより明治以來新語の殖れた事は限りを知らない、而してそれらの大半は今日の字書中に漏れてゐる、併しこれは明治以來のことだから自から別としても差支はないが、せめて維新以前までの國文學書、文學史上に立派に特筆大書されてゐる諸大家の作だけは其字引さへあれば読み得られるといふ字書がほしいもの、ところが日本にはさういふ字書が只の一冊もないとは文明國としては餘り面目でもない、それやこれやの必要上からいへば今度の近松の新釋の如きは大きな貢獻であると思ふ。

然しながら只今も言ふ通り此種の文學書に對しては其註釋の手心が頗る難かしい、和漢も古今、雅俗も古今、内容も神祇釋教戀無常、駄洒落あり出鱈目ありといふのだから餘り生真面目に一字一語に念を入れ過ぎて博引旁證の傳統しらが煩瑣になりはじめたら姑末にをへない、蓋し釋の要は簡明になる、屋上に屋を架したる蛇足を加へたりして讀者を岐路に迷はしたり道草ばかり食はしたりするやうなのは適當な案内者ではない、とはいふものゝ前に例の無い新らしい編述や解釋を試むる場合には誰しも免角新發見の苦心を見せびらかしたくもなり、それこれ調べた有りつたけを並べるといふ弊が生ずる、これも新代の學者には少ないが、昔の學者には多かつたもの、所謂銜耀、或は道樂が主になつて兎角横道へ説明が外れる、若しくは此のやうな甘い事を書き並べては物識りの思はくも如何と初心者の指南車たる職分を軽く見て説明すべきことをもわざと省くなど、此の三條は兎もすると註釋者の陥り易いところであ

る、要するに此種の註釋を試みる人は舊式の學者風でも困るし道樂氣の多い通人肌でも困るし、存外其人を得難いものである、ところが水谷不倒君の新註釋は確にこれらの弱點を脱してゐると思ふ、君は西鶴近松をはじめ元祿文學通ではあるが、彼等に酔つてはゐない、近松を研究するにも道樂にやつたのではなくて、新代の學者風に研究し、文章も明快で、註釋も簡にして要を盡してゐるところが妙である、(もとより露伴の仕事だから多少の缺點もあるであらうが、それはおひ／＼に修正することゝしたなら)遠い事は知らず近い未來には逆も同君の著に優る新釋が出来やうと思はれない云々。(不倒記)

近松の越前産説に就きて

好 尚

當代の近松通と聞けたる水谷不倒氏は、近松の越前産れといふ説に就て、たゞ一口に取るに足らずと抹殺されたり。

然るに近松の祖父杉森杏園は、醫術を以て豊太閤に仕へて法印に叙し、父受慶は福井侯に仕へて法眼に叙し、近松の弟岡本一抱に至るまで三世爲

竹(翁草には以筑に作る)の通稱を襲げりといふ。一抱と近松とが異父兄弟にあらざる限り、福井侯に仕へし杉森受慶の子とすれば、近松も一抱も越前にて産れずとは斷言し難からん、一抱は後徙りて京師に居るとあれば、近松も越前より京に徙れりといはばいふべし。

不倒氏は又近松の父(或は兄)は信親なるべく信義のぶで、信秀は近松の弟なるべしといはれたるが、信親と

受慶とは同一人にもや、信義、信秀のいづれか一人が岡本一抱に當れるにや、并に疑問に屬して僕の斷定し得ざるどころなり。

一抱その兄近松に向ひ、淨瑠璃の作は世に於て益なし、奇才を抱いてこれに従事するは惜むべき事ごもかな、と語りしに、近松笑うて曰く、それはお互ひさまなり、諺解ばかりに骨を折るとは困つたことかな（一抱は盛んに古醫書の諺解を著し、人）後世末學の徒苦心して本書を研究することなせず、淺近なる諺解を便りに人の生命を誤るかも知れずといひければ、一抱折から着手中の素問諺解を中止したりとか。事のついでに記しておく。

（淺田栗園の皇國名醫傳に據る）



に角丸の芝居といへるありてすべ
て六の櫓あり 故曉 晴 翁

道頓堀櫓のかすもむつのくや

伊達な男がまもる大木戸

近松鰻頭をよめる

竹本攝津大椽

廣濟寺道も近松まんぢうは

川べの味も平あんもよし

編者曰近松鰻頭は神崎驛前朝井茶店に驚けり

國 性 爺 竹本叶太夫

名作のから味しぶ味の國性爺

今は御國のあまい砂糖地

近松巢林子 小野 利 教

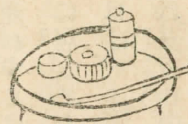
わざをきの低きすさびの中にしも

高きをしへを見する君かな

埋火のけぬ間あだなるくちき書

朽ちぬは君がほまれなりけり

聲曲類纂所載



古今文苑

詩

題近松平安翁像

穗積 以貫

見性却清醇。享齡擬壯椿。春溫渾滿腔。空眼轉洪鈞。勻翰譚歌妙。少賡綺語神。甲休門榜櫟。樂隱特相親。

狂 歌

みのや三勝が墓に謁でて

故雕窩 主人

いと竹に耽る藝子もなきあとの

うき名は人にうたはるゝなり

道頓堀角の芝居の東の辻なる西南



川 柳

（忠臣藏讀込）

浪花勝 雀（故人）

鶴が岡後ろの仕丁鶴に見ね

疳癪を止める本藏松の鍼

遺恨の間違ひ侍が鯛になり

判官のたましひ僅か九寸五分

五ッ目で命あるのは猪ばかり

九太夫がはさんだ蛸に骨があり

師直が鬼に由良れて逃て行く

(此の種の投稿を待つ)

狂句

赤穂義士讀込

作者 不詳

大石は忠臣蔵の土臺なり
大石のせがれに主税こりやよい名
武のほまれ鱸の干物が四十八
煤取にしてはと吉良の兩隣

ほろゑひの心地よきをり

水戸 光園(愛吟)

蓮の葉におく白露は

釋迦の涙か(此時目をこする)

有がたや(此時合掌禮拜すること)

其時蛙が飛で出て(此時蛙の如く兩手を)

そりやおれが小便じや(吃驚の體よろしく)

打つて、久しく千日前に繁昌を極め、夙に大阪名物の一つに數へられた播磨席は、此度其の地所家屋共に七萬餘圓で人手に譲渡して、廢業する事になつたが、同席の創立者伴直之助は播州姫路在今宿の生れで、屋號を播磨屋といふた所から、播重と名乗つたのである。創業の際は同國生の竹本政之助といふがシに成つて働き、續いて豊竹呂昇が満都の人氣を背負て立つたので、おかげで伴は浮み上り、遂に巨萬の財産をこしらへて、女義太夫界の覇權を握るに至つたのである。元來主人直之助は一種の奇物であつたさうな。當地の播州會にはいつも自分が口上を言ふて、席の娘義太に語らせて餘興を添へるのが例になつて居たさうである。前年主人物故の後、官人の娘おさだが養子を迎へて遺業を繼續して來たが、今の主人はこんな家業は嫌ひなので、番頭の藤原光次郎と相談の上遂に廢業に決したのである。そこで今度亡主追

○淨瑠璃文句語呂合募集

題

一、ソウ云ふ貴殿は千崎彌五郎、
二、早の勘平若氣の誤り

御存の語呂合。題は淨瑠璃文句なれど、合句はそれに限らない。一例を挙げると、「これも昔は弓張の」とある題に、「聲をからした水銀の」とつける。又「たわて久しき對面の」とある題に、「ためて穢なき灰吹の」とつける如きものです。どうかざし／＼お附け下さい。(文藝係)



聲曲類纂所載

●藝界時報

●播重の記念碑

日本女淨瑠璃の修行場と銘

善の爲、近松門左衛門翁の墳墓地なる攝州川邊郡久々知村の廣濟寺境内に約三坪の地面を借りて、立派な記念碑を建立し、祠堂金をも納めて、永く回向を頼むことになり、碑字の揮毫を本會の小野幹事に請ひ、當月二十八日には竣工の筈だが、當日は追善供養式のみを舉げて、除幕式は秋冷の好氣節を待つて行ひ、其の日は縁故ある女義太夫數十名參拜して盛んなる餘興淨瑠璃を催すと云ふことである。

●小林長十郎といつば、旗下八萬騎の一人か、雲右衛門が讀みさうな上杉家の附人かと思はれるが全く然うでない。堀越福三郎が、中村長三郎の弟子となつた當分の名である。追々仕上げて半人前になると、堀越福三郎と名乗り、彌々仕上げて一人前になれば、十代目團十郎と成る筈で、先月末雁治郎丈の興行先へ行つたさうだ。

●入道雲右衛門 何を感じつたか、雲右衛門は

先達て南地の重亭へ最負連を招待し、坊主披露を遣つたが、今月より辨天座へつん出て、義烈百傑傳、雲居上人、義士大高源吾をやるさうである。爰に面白いことは入道の車夫に、淨瑠璃で身臺を潰した男が居て、おまけに出入の太工に大の金太郎がある。晝の暇潰しに毎日二人に語らせて、入道の一門ずらりと列つて聞くさうである。所が、大概閉口して、用事に附託けて立つて了ひ、残るものはこくり／＼遣り出す中に、入道獨傾聴して、大椽よりも安平の方がうまい、とばかり涙ほろり／＼。

●芝居の芝居 子を思ふ心も深き旅の雁、並ぶる羽のかたそぎで、「かほぞ重き脇加苔兒、いかに見捨て行かるべき、去とて往かで協はぬ仕儀」、いざとばかりに氣を取直し、病める吾子を振かへり、心と共にしめ直す帶の名所、名にしおふ博多をさして行きにけり。後には女房兎つおいつ、夫

を思ひ子を思ふ心二つに身は一つ、何とおせんがせんかたも涙に濕る懷の夫の繪姿取出し、我子の寝顔と見くらべつ、抱いつ、まろびつ泣沈む……●桐竹紋十郎の病氣と豐澤廣助の全快 操偶界の最古老桐竹紋十郎は、腸痛といふ難症に罹り、大學病院に入院の上、手術を受ける事になつて居たが、主治醫の忠告によりて見合することになり、目下祇園の宅より或寺院の座敷に移り、専ら靜養中であるさうだが、悴の和三郎甚だ心配でたまらず、芝居を休んで、母親のおふく、其他五名の藝妓仲居ども附切りで、忠實しく介抱してゐる、紋十郎の代役は取あへず三左衛門が勤めることになつたが、藝道に熱心な紋十郎は病中も厭はず、手を取らんばかりに教へ、本人も亦必死になつて勤めてゐるさうだ。吾人は一日も早く全快を祈るのである。然るに兼て病氣中の豐澤廣助は、全快して文樂座へ出勤して居るさうである。(四日稿)



(細大なく御通報を請ふ)

●竹本錦太夫 は春子菅等の一座で、一日から神戸湊川の多聞座で開場して、初日より満場の好人氣で、いづれも得意満々たる所、惜しや錦太夫は豫備歩兵上等兵といふ所から、勤務演習に召集されて、來二十日より二週間、肩衣の代りに軍服つけて、姫路三十九聯隊へ入營するさうだ。●竹三郎の東下り 豐澤竹三郎は前に猿集ふ四國落をきめたが、一向思はしくなかつたので、今度は鳥がなく東の都へ泳出し、鳥なき里の蝙蝠を氣取るといふ。●竹本南部太夫 文樂座の夏休みから、一年餘りは各地方を巡業するさうで、同行の若手俳優は俄仕込の稽古をやつて居る。淨瑠璃修行も面白からう大に遣るべし。

- 土居會長は去月下旬清國より歸られたり。
- 岡田評議員は兼て病氣の處目下快方に向ひつゝあり。
- 賛助員竹本錦太夫は勤務演習の爲姫路三十九聯隊へ入營。
- 賛助員竹本南部太夫は文樂座夏休より各地巡業
- 賛助員桐竹紋十郎は腸癰にて重患目下京都にて療養中。
- 賛助員豐澤廣助は病氣全快。
- 發起人竹本大隅太夫は、名古屋より美濃路に入り、多治見に於いて中風症を發し、目下同地に靜養中。
- 賛助員竹本春子太夫は、堀江座休場中九州地方へ巡業。

寄稿 歡迎

- 一、近松翁遺品と其の所藏家
 - 二、各地斯道團體の狀況
 - 三、各地淨瑠璃會の景況及び批評
 - 四、地方天狗連の氏名年齢調及び得意の語物と其の世評
 - 五、演藝に調する所感様のもの
 - 六、市内各座及び各地に於ける劇評
 - 七、古今斯道家の逸話と傳記類(失敗談成功談共)
 - 八、古今演劇に關する詩、歌、俳句、狂歌、情歌、謎、一口話、考物等
 - 九、古今斯道家の著作物遺墨類
 - 十、斯道に關する珍談奇話並に端書便り
(面白く手みじかに書きたるもの)
 - 十一、淨瑠璃文句中の質疑
 - 十二、斯道家斯道上に困める寫真類
 - 十三、その他古今ありとあらゆる事柄
- 右寄稿に對し價值あるものは相當の報酬を進呈す

● 豫 告

本誌は創始の際整頓不備の點多く讀者に對し切に其の罪を鳴謝する所なり次號よりは最趣味ある古畫の多數を掲載し名家訪問録劇評等をも加へ努めて有益の記事を網羅すべし尤既に東西諸文士の寄稿堆積せるも遺憾ながら次號に廻したるもの尠なからず請ふ看よ如何に次號の多趣味にして豊富且つ精選せるかを



● 眞正の豫言

を聞かんご欲せば必らず之れを見よ

方今社會人智の發達と共に生存競争亦益々激しきを加へ表は甚だ文明を粧ふも裏は彌々暗黒を示せる事實は今日占術の盛なるを見ても如何に世人が疑惑夥しきかを推測するに難からざる也、茲に於て奇貨置くべしと一文不通の賣卜者蠢々として起り妄りに吉凶禍福を云爲し以て生計を營む者現に大阪市内二千に及ぶと云而も之を信じ身を過ち産を破る者多しと聞に及びては豈浩嘆の極にあらずや、余占道を研究すること多年大家と聞けば遍く之を叩き或は和漢の占書を蒐集して推敲を積むも未だ妙所に至る能はず失望言ふべからざりしに時哉頃者故根本博士高弟にして前年東京國學院に於易を講せられし有名なる碩果子九鬼先生が當市易學振興會の督學に聘せられ大に斯道の革新を圖られつゝあるを聞き直に參道其門に入り古今の秘義とする所を開放至懇の教授を受け後之を實占に試みるに實に百占百中自ら驚異措く所を知らず初めて世間が先生を稱して天下唯一の大家と爲すを信せり、今余は一定の職務あり卜占を業とする能はざるも世人が身を過つ多きを見て同情の念禁する能はず業餘通信以て一般の占斷の請に應せんを、希望者の方は其年齢及事柄を詳報あらば直ちに占斷書を送付すべし占斷料○普通一事件金五拾錢○一ヶ月割金壹圓○同五ヶ年分參圓○同拾ヶ年分五圓○定期米株式相場判定一ヶ月分參圓○別に九鬼先生に占斷を望まるゝ方は以上の倍額を要す

大阪其他全國各地諸大家執筆選評

邦の光

毎月一回
十三日發行
一冊拾錢

本誌は和歌及國文學獎勵の目的を以て定期を過たず毎月發行す浪花歌壇に於ける最有力なる諸會の集歌及び選歌を掲載し又斯道名家の筆に成れる有益の記事豊富なり、歌道並に國文學に志ある諸氏は奮つて入會せられたし

大阪市東區高津自性院内

發行所 皇風社

歌學大家三十餘名贊助(執筆及選評)

あそみどり

毎月一回
十日定刊

定價一冊拾錢 半年分前金五拾五錢
一年分前金壹圓五錢
郵券代用一割五分増 郵送料不要

●第四年七月の卷

七月十日發行

本誌は短歌を中心として詩文等に至るまで趣味あるものを掲載す。殊に評論は本誌の特色なり。有志の君子淑女は試に一讀せられたし。見本は郵券拾錢にて呈す。

大阪市南區舊梅屋敷裏

發行所 水葱園吟社

振替口座大阪三七二二番

中央歌文會會友募集

(東京市神田區三崎町三ノ一)

●本會は全國に於ける斯道の先輩及初學者と相携へて、和歌の研究を勵み、和文の發達を圖る ●本會は之を會友組織とし、會友證を交付す。入會の際は、入會金拾錢及會費一ヶ月拾貳錢一家二名以上の入會は、雜誌一部にてよくば、一名の外は會費半額の割にて收むべし。但教育社會は、會費は拾壹錢、同五名以上聯合は拾錢づゝとす ●相互に氣脈を通ずる方法としては、毎月雜誌「歌文」を配布す ●會費滞納者は退會と見なし、雜誌を送らぬ ●雜誌の内容は、古今の名歌、名文、名論、歌文批評、歌文解釋、日記、紀行、隨筆、逸話、文學史及文法上の議論、名所動植物の研究、初學欄、互告欄、應問欄、雜錄、添削摘記、歌合、諸支部より寄せられたる雅作等。兼題は毎月四五題、時々懸賞あり。課外は、會友より兼題外に出詠せられたるものより掲載す。口繪には古今の歌人及會友の肖像並筆蹟等より、名所動植物等參考とすべき物 ●本會に名譽會友、特待會友、特選會友を置く。名譽會友は、當代の先輩を推薦し、特待會友は、會友中兼て功者の名ありし人を推し、特選會友は、會友中の秀作家にして、且本會の爲に功勞ある人を推す ●本會に名譽幹事を置く。 ●本會に名譽幹事には、同志の勸誘を托し、本會の發達に助力を請ふを以て、才學徳望、衆に擢んづる人を推す、名譽幹事、或は其他と雖、會友一名にても勸誘せられたる時は、之を聯合會友として、誌上に連名掲載し、五名以上に及びし時は、各々會費拾壹錢とす。既托の名譽幹事ならずとも、名譽幹事と同様の功勞ある人は、猶名譽幹事の任を托する事あるべし ●本會は、希望者の爲に添削を爲す。添削料は、短歌一首金壹錢、長歌今樣新體詩一首四錢、文章一篇六錢 ●本會宛の送金は、振替口座一二二六一(手数料貳錢を加へ)により、又爲替ならば、必ず東京市麹町區三番町局へ振出す事。切手代用は貳錢、壹錢又は五厘の切手に限る。必ず一割増の事 ●本會への照會は、總て返信料を添ふべき事。 ●支部規定。支部は、會友十名以上聯合したる所に置く。但見込によりては、それ以内の聯合にても、之を置く事あるべし ●支部は、其地方に於ける雅友の親和を期し、斯道の發達に務め、且つ本會を、盛運に向はしむるに、有力なるべき事 ●支部には、支部一切の整理を托せむが爲に、支部長一名、幹事數名を置く。其選舉は、支部員の互選に付す ●支部にては、毎月若しくは隔月或は臨時に、便宜の日を期し、雅會を開き、歌を詠する事は勿論、務めて斯道上の研究を爲し、其詠草及び研究の事柄、並に狀況等を本誌に報告し、一般の參考に供する事 ●支部員五名以上聯合は、會費拾壹錢づゝとす。

●諸公債
●諸株券
賣買

右勉強ト確實ヲ以テ取扱可申候間多少ニ不拘御注文希上候

大阪市西區阿波座中通一丁目

高木兩換店

電話西	三〇五〇番
	三〇五一番
	三〇五二番
	三〇五三番
	三〇五四番

寫眞

向暑之候尊堂益々御清
義今般心齋橋北詰に新館を建築し漸
く竣工候に付ては本月本日より開業
仕候尤も諸器械共に新式のみを用ひ
撮影可仕候間何卒船場獨立軒同様御
引立賑々敷御來寫の程奉願上候先は
開業御案内迄如斯候 敬具

新築

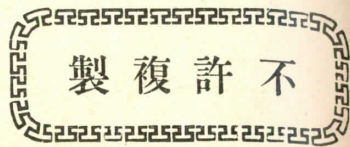
心齋橋獨立軒

(電話南一八三三)

七月一日

博勞町四丁目

船場獨立軒



不許複製

明治四十三年七月二十日印刷
明治四十三年七月二十日發行

(毎月一回十日發行)

發行所

編輯兼
行人
印刷人
印刷所

近松會事務所

和田次郎
大阪市北區中ノ島四丁目三十一番地
辻岩雄
神戸市三ノ宮町一丁目三百二十番地
明輝社
神戸市三ノ宮町二丁目三百二十番地
大阪府北區中ノ島四丁目三十一番地

定價

一冊金拾五錢 (郵券一割増但一錢切手に限る)
◎一ヶ年誌料金壹圓五拾錢を拂込まるゝ人は會員となし本誌無料配付(郵税不要)の上種々の特權あり

賣捌元

大阪市北區東梅田町十九番地(電車停留所側) 盛文館書店

廣告料

特別一頁	金貳拾圓	半頁	金拾貳圓
普通同	金七圓	同	金四圓
壹行 (五號活字二十二字詰)	金參拾錢 (但シ一頁一段)		

注意

本誌は全國到る處の書籍雜誌店に有り
本誌廣告御望の方へは御報次第事務員參上御承合可仕候

